

# 湖南の禪宗の推移（上）

鈴木哲雄

## 一 地理的概観

湖南地方は兩湖盆地の南部を占める。東は江西に接し、南は廣東廣西に境し、西は貴州、四川、湖北に疆し、北は広く湖北と界する。長江は四川の三峡を経て湖北に入ると一時に広げ、東南に蛇行して洞庭湖の北を東北に転じ、湖北の武昌に向い、一転して再び東南に転じて江西の九江に向う。この間に幾多の大小の湖が散在し、平地と湖が半ばする。これらの湖は、長い年月の中で何度も長江が流れを変えて生じたものである。湖の間を川が四通八達し、水運が発達している。

洞庭湖からまっすぐ南側に広い帶状となつて湘南丘陵に達する一帯の広範な地域が平野となつていて、その間を湘江が南から北へと長流する。湘西丘陵の北部、つまり湖南の西北部は、西南から東北に伸びる武陵山脈であり、貴州

湖南地方は北東部が洞庭湖を中心とした湖で主部を占める。西部は丘陵地帯となつていて、これを湘西丘陵とい

の西北部に端を発している。湖南の中央西部は、同じく西南から東北に向って洞庭湖の近くまで伸びる雪峯山脈が横たわっている。武陵山脈と雪峯山脈の間を西南から東北に流れ、挖窖湖に注ぐ河を沅江という。雪峯山脈の中を南から北に向い東流して洞庭湖に注ぐ河を資水という。

湖南は北緯二十五度から三十度の間にある。南嶺があるが、一千余メートルの高度では南方からの暑氣を柔らげるることはできず、また湖が多く、河川が交錯し、森林が繁茂しているため湿気が多く、亜熱帶地方の觀を呈する。南部と北部では少し氣候が異なり、南部は冬に雪が降ることはまれであるが、北部は低地なので、北方の寒気がそのまま入ってきて、気温が低い。夏は丘陵地帯は比較的爽やかであるが、平地はみな気温が高く、その上湖水の蒸発で湿気が多く、酷暑となる。雨量も全般的に千二百ミリを超える。中部と南部は千五百ミリを超える。

衡山は通称南嶽といわれ、中国五嶽の一で、主峯は千二

百余メートルあり、宗教的にも古来から有名で、遺跡も多い。

一帯に土地が肥えているから農産物は豊富で、米、麦、高粱、玉米、甘薯等が主産物である。米は二毛作で収量も

多く、「湖廣熟すれば天下足る」という諺もある。長沙は全国最大の米の集散市場の一つで、多量の米を省外に移出している。その他棉、麻、茶、絲、苧麻等が全国第一の産量をほこり、沅江湘江流域が中心である。樹木の種類も多く、沅、澧二水流域のものを西湖木、湘、資二水流域のものを東湖木といつている。交通運輸は専ら水路によつているが、陸路は粵漢鉄路、湘贛鉄路、湘黔鉄路が幹線である。

湖南の主要都市は、洞庭湖の周囲と、沅江、資水、湘江の流域にある。長沙が省の中心で、政治経済商工業の中心地となつてゐる。嶽麓は湘江の対岸にあり、湖南大学が山麓にあるが、ここは宋代の嶽麓書院の趾である。衡陽は水陸交通の要地で、湘江中上流の物産の集散地となり、湘南に繁榮する商業都市である。常德は湘西の中心地である。

## 二 開拓期の禪宗の動向

南宗禪は南嶽の石頭、江西の馬祖の時期に確立する。それで石頭の寂年である七九〇年頃をもつて、禪宗史上に一応の区分ができる。これを一先ず開拓期と名づける。開拓期は湖南地方に禪宗が入つていく時期で、知

られる人はまだ十指余りに過ぎないが、現在それだけ確認できるということは、既にある程度の勢力をもって禅宗が地盤を固めつつあつたとみてよからう。唐朝の斜陽化は、人々に経済的実力を伴わない都よりも、実質的地方に目を向けさせてきた。地方の実力の向上が、南宗禅の地方分散を促したし、また南宗禅の性格も、権力的形式的そして華美を誇る都より、質実素朴な地方に肌の合うものがあり、そのような時流に合致して、各地方に進出していったのであった。<sup>(1)</sup>湖南地方もその一つで、隣の江西地方と並んで、<sup>(2)</sup>禅宗が同時に早くから進出していったところであった。

開拓期においては、江西の禅宗が、北の湖北の四祖五祖の住した蘄州双峯山と、南の廣東の六祖の住した韶州曹溪の中間に位置する関係で、四祖五祖六祖という南宗の伝燈の意識が濃厚に漂う中で進出していったのに對し、湖南の方は、都長安より湖北を介して湖南へという北から南、都から地方という線の上で進出し、一方六祖の韶州から湖南へ、即ち南から北への進出という伝燈意識も背負っていたとみられる。北から南の湖南へは、北宗系、南宗の荷沢宗系が流入し、南から北の湖南へは、南嶽、石頭に代表される南宗系が進出している。その接点は南嶽にあつた。

ところで朱陵（又は金陵ともいう）の慧炬（又は智炬）がどこで『宝林伝』十巻を撰したのか決定をみていいないが、南嶽中に朱陵というところがあつて、南嶽で撰したのではないかといふことも考えられているのである。<sup>(3)</sup>南嶽には經藏があつたし、後のことではあるが、雪峯の弟子惟勁は南嶽の報慈寺の東蔵（即ち三生蔵）に住しており、宝林伝を受けて『続宝林伝』四巻を著わしている。宝林伝は經論の引用が多く、經藏のあるところでなければ書けない。また菩提達摩章に代表されるような識緯の言は多分に道教的影響を感じさせ、道觀の多い南嶽を無視できない。朱陵には朱陵洞があり、それは三十六洞天の第三洞と位置づけられ、招仙觀の後に朱陵祠があつた。<sup>(4)</sup>これらのこととは慧炬が南嶽で宝林伝を書いたのではないかといふ推定を助けるものである。果して宝林伝が南嶽中での所産とするならば、南嶽が南宗禅を決定せしめる位置にあつたとみなければならない。

とまれ南嶽は開拓期の縮図を表わしている。そしてそれは次の伸張期にまで及んでいる。

【潭艸】（長沙郡）潭州は湖南の中心であるが、まだ開けず、僅か四名知られるだけである。

(七一三) 南嶽の司空山に入つたことを『宋高僧伝』卷八初見ではいうが、『景德伝燈錄』卷五では司空山無相寺に住したという。司空山というのは衡州と限らず安徽等他にもあるが、やはり潭州の司空山をいうのであろう。というのは、司空山のある攸県は五代時代になると潭州に属するが、唐代には衡州に属していたから、その関係で宋高僧伝は南嶽司空山と言い誤つたのであろう。司空山は攸県東四十里にあり、南齊の司空張岳がここに隠れて得道したので名づけられた。<sup>(5)</sup> また顕聖巖が県の東五十里の宝相寺の後にあり、世に伝うるに張司空がここに居た、といわれる。司空本淨も姓は張氏で、天宝中に楊光庭が薬草を探つてゐるのに邂逅し、終日道を論じた、という。無相寺と宝相寺との関連も考えられ、光石山の菩提寺・惠光寺（攸県）も司空真人が建てたといつてゐることから、張岳と司空本淨との混乱も考えられないことはない。楊光庭は都に帰りその旨を奏したので、天寶三載（七四四）十二月、本淨は召し出されて白蓮亭に安置せしめられ、勅命で太平寺の遠法師ら両街三碩德らと法論を闘わした。百矢の一兎を逐うような質問にも、ゆうたりとした態度で経を引いて滔々と答

え、滞るところがなかつた、と宋高僧伝では伝えている。そこに登場する人物は、泰平寺遠法師の外に香山の慧明（志明）禪師、白馬寺の慧真禪師、法空禪師、福先寺の安禪師、昭成寺の達性禪師の五人だから、宋高僧伝の三碩徳というのは五碩徳の誤写であろう。本淨は即心是仏、無心是道を主張した。東西両京の対論者にあっては無心が厳しい論難の対象であつた。般若と華嚴との立論の基盤の相違から生じたものではなかろうか。別して南北両宗の小論争ともいえよう。本淨の住した司空山は、地理的には潭州といふよりも、宋高僧伝にいうように南嶽の範囲に入れる方が適当であろうが、行政区画よりみて、今は潭州に入れておく。付言するが、楊光庭は杜光庭をもじつたのであろう。杜光庭はずつと後の人で、懿宗（八五九—八七三在位）の時、万言科を設けたが、選に漏れ、天台山入つて道士となつた。懿宗朝に戸部侍郎となつた。楊光庭は架空の人物である。いつたい玄宗は道教に興味を示し、特にこの天宝年間に入る<sup>1</sup>と、それに傾倒していった。荷沢神会が盧奕の彈劾に会うのもこの頃で、ようやく南北両宗の論争も表面化してきた時期であった。玄宗は十月から十一月にかけての一箇月間

驪山の温泉に行幸していた。十二月には確かに長安に帰つて、いたが、禅宗の論争に勅を命ずるほどの熱意をもつていたであろうか。むしろ朝臣の側の希望であつたろうし、彼らかも興味を示したとすれば、宋高僧伝に記述されるような司空の道教的傾向に対してものと、いうよりほかはない。勅命ではなくて、仏教擁護側の朝臣の企てた対論のようと思われる。

南嶽懷讓の弟子の法空は湘潭県西百里にある東霧山<sup>(7)</sup>に住した。古、東霧庵<sup>(8)</sup>があつた。目録に名を出すだけでそれ以上のことわからぬ。

翠微恒月（七〇二—七八〇）は望湖山翠微巖下の翠微院に住したという。望湖山が山名なのか、単に湖を望む山の意なのかもわからぬし、翠微巖もわからぬが、潭州治下で洞庭湖を望むところといえれば湘陰県あたりか。恒月の父は塩商人であったが、竊盜に襲われて江上に溺死し、母も死んだので、報恩のために出家した。嵩山の禪会で学んだから普寂の弟子であつたろう。四方の学者は蜂の王を得たようになつた。

荷沢神会の弟子の摩訶衍は、はじめ降魔藏に学び、それから長安で義福、小福に学び、ついで神会に学んで、後に

長沙の嶽麓寺に住した。李邕の「嶽麓寺碑」に名を出して、いる。彼はチベットの贊普王の下で頓悟漸修の法論をたたかわせた人である。七八六年入藏している。

潭州はまだ禅宗が入りかけたばかりで、南嶽には遠く及ばなかつた。

【衡州】（衡陽郡、衡山郡）湖南における初期の禅宗は南嶽でほとんどが占められる。南嶽は衡嶽で、五嶽の一として、中国歴代王朝にとつても聖なる山であり、道教も仏教も共に早くから入つて、混然とした信仰の山であつた。中嶽たる嵩山で北宗が栄え、南嶽たる衡山で南宗が栄えるのは、禅宗の勢威を示すものである。南嶽は南宗禪の源泉でもあつた。

禅宗関係では、隋末に、後に弘忍の法を嗣いだ慧安が、まず最初に南嶽に入り、衡嶽寺で頭陀行を修したという。しかし慧安は百二十八歳で寂したといわれ、伝説的になつてゐるといえよう。

南嶽懷讓（六七七—七四四）は慧能の幾多の弟子の内の人であつたが、馬祖を出すに及んで、青原行思と共に、後世、慧能直系の弟子として尊ばれる。祖堂集で前半に青原系を、後半に南嶽系を整理して載せるが、系譜世代を青原

下何世、南嶽下何世と称するのは景德伝燈錄にはじまる。以後の燈史はそれを踏襲する。北宗、牛頭宗、荷澤宗等が早く滅んで、禪宗が南宗一邊倒となり、青原、南嶽は六祖下分派の祖としての位置を得るのである。

南嶽の伝については『宋高僧伝』卷九、『唐文粹』卷六二即ち『全唐文』卷六一九に載せる張正甫の「衡州般若寺觀音大師碑銘并序」や、『祖堂集』卷三、『景德伝燈錄』卷五で知られているのであるが、『宝林伝』は卷七、九、十の三巻を欠くために、その中に南嶽の章が立っているであろうと予想されながらも、確かめられていなかつた。ところが椎名宏雄氏が駒沢大学図書館蔵の『景德伝燈錄抄』中に懷讓章のあつたことを明らかにされた。それは宝林伝に載せておるはずの全文ではないが、宋高僧伝で元和中（八〇六一八一〇）常侍帰登が碑を撰したというよりもむしろ古い、南嶽の伝記の基本となるものである。ただし宝林伝記載の内容は知られているものと別に異なるものではない。特に祖堂集が宝林伝を全面的に受けている。椎名氏の論文は、年代が遅れて成立している碑銘や燈史類の記述に対し、ともすれば南嶽の史実性に疑問が持たれがちであった

のを、それらが宝林伝にまで遡ることができるなどを明確にされたことで、この一点からみても価値ある論文である。  
今知られる限りにおいて、南嶽については、張正甫の碑文や宋高僧伝の南嶽章に依るのがよい。張正甫の碑文については『全唐文』『唐文粹』よりも『仏祖歴代通載』の方がよいと思われる。ただし通載は銘を省略している。特に両者の異なるところは、全唐文等は元和十八年惟寛懷暉が南嶽の塔を樹てたとするが、通載は十年となつていて、元和は十五年（八二〇）までである。どちらが正しいか。この碑文は惟寛懷暉の依頼を受けて、張正甫が撰したのである。張正甫は泰和八年（八三四）九月、八十三歳で卒しているから、七五二十八三四の人であるが、元和八年湖南觀察使となり、十三年大理卿に除せられているから、湖南觀察使の時の撰文であろう。それに懷暉は八一五年の十二月十一日入寂しているから、元和十八年はおかしく、結局八は衍字で、通載の元和十年とする方が理に合する。

先に述べたように、七四四年には司空本淨が京師に出ており、この頃荷澤神会の活躍も最も盛んだったし、少し遅れて七六年には南陽慧忠が入内し、七六年には牛頭宗ではあるが徑山法欽も入内した。馬祖門下では鷺湖大義が

徳宗（七七九—八〇四在位）に召されて最初に入内し、続いて章敬懷暉が八〇八年章敬寺の毗盧遮那院に入り、詔命で麟徳殿に上つた。そして八一〇年には興善惟寛もまた麟徳殿に上つてゐる。馬祖下の全盛時である。馬祖の碑は、七九年、權徳輿の撰文で建てられた。ここにおいて馬祖の師南嶽の顯彰に迫られていた。南嶽の碑がないのに馬祖の弟子たちの碑が建てられることが憚られたことよりも、相次ぐ馬祖下の入内で、慧能、南嶽、馬祖の法脈をはつきり天下に示す必要があつたのである。この後、西堂、紫玉、興善、百丈等、次々と馬祖の弟子の碑が立つていった。

南嶽懷讓は俗姓杜氏、碑銘では本貫が安康で、長安に生まれたとする。その他は金州の人とする。ただし宝林伝は安康の人とする。宋高僧伝では、弱冠にして荊州玉泉寺の弘景律師（六三四—七一二）のもとに至り、出家し、受具し（伝燈錄では十五歳出家）、担禪師（伝燈錄では同学の担然とする）の勧めで嵩山の慧安和尚（五八二—七〇九）に学んだというが、碑銘では大士智京によつて法儀をそなえ、長安長老（慧安のこと、老安という同じ）によつて塵垢を超出したという。ところが宝林伝では次のようにいう。儀鳳二年癸酉之歲四月八日に生まれ、六道の白氣があつたの

で、太史がこの瑞氣を見て、それが金州の分野の安康であること高宗に奏した。高宗は韓偕に勅して、杜家に安慰を賜つた。懷讓は十歳になると仏經のみを愛し、玄靜三歳がここを過ぎた時、父の杜光奇に、この子は出家の後、上乗に契い、仏理を会得することを予言した。垂拱四年丁亥之歲、十五歳、荊州玉泉寺の弘景律師につかえ、通天元年（六九六）丙申之歲四月十一日、当寺に受戒した。久視元年（七〇〇）庚子之歲七月十八日、自ら嘆じて、夫れ出家は無為の法であるのに……（景德傳燈錄抄の引用はここまで。以下は祖堂集で予想できよう）と述べてゐる。宝林伝は著しく文を飾つてゐる。玄靜三藏は玄辨（六〇〇—六四四）のことであろうが、玄辨は既に亡き人であつた。それに出生と出家の時の歳と干支が合わない。従つて出家の年齢も合わない。儀鳳二年は六七七年、癸酉は咸亨四年で六七三年に当たる。垂拱四年は戊子で、六八八年であり、丁亥は垂拱三年で六八七年に当たる。儀鳳二年出生の場合、受戒は二十歳であるが、出家は十三歳であり、丁亥の歳出家なれば、十二歳となる。咸亨四年出生の場合、二十四歳受戒で、垂拱四年出家なれば十六歳に当たり、丁亥の歳なれば十五歳の出家となる。以上から出生と出家の歳

は不明確といわざるを得ないが、張正甫の碑銘で、天宝三載入寂、春秋六十八、臘四十八というに一先ず從わねばならない。

碑銘では、その後慧能に学んだが、藩閥に涉る者十三（一二）名、堂室に躋（のぼる）者が十一名おり、懷讓は後学弱齡であったから末席にいた、という。この数字は『曹溪大師伝』の六人、敦煌本『壇經』の十大弟子のいすれにも合致せず、『景德伝燈錄』の出す門人四十三人という数に至る過渡的なものをあらわしている。<sup>17</sup> そして慧能より秘印を受けてから、武当山に十年住し、それから衡嶽に入つたとする。武当山に十年住したというのは碑銘のみがいうところである。ここは後に南陽慧忠が住するところで、留意しておかねばならぬ点である。伝燈錄では衡嶽の般若寺に入つたとし、宋高僧伝では觀音台に入ったとする。觀音台と懷讓の最勝輪塔は峯一つ距てたところである。般若寺は慧思が大蘇山より衆を領してここに道場を建立し、法華、般若、念佛三昧、方等懺悔を修したので般若寺と名づけられ、後に福嚴寺と改められた寺で、南嶽中隨一の名刹である。天柱峯の東南中腹にある。<sup>18</sup> 福嚴寺から一華里上つて、北方に少し下ると磨鏡台に出る。馬祖庵（伝法院）があつ

たところである。この台の南に懷讓の最勝輪塔があるのである。常盤大定氏は磨鏡台が觀音台であるとみておられない。天寶三載（七四五）八月十日入寂した。衡陽太守令狐権は元和八年（八一三）懷讓の行業を問い合わせ、財を捨てて忌斎に充てた。これから以後毎年八月に觀音忌が営まれるようになつた。宝曆中（八二五～八二七）大慧禪師と謚され、塔を最勝輪塔と号する。帰登の碑文があつたとされるが、帰登は八二〇年卒しているから、張正甫と前後して撰せられたと思われる。

六祖慧能の弟子堅固と梵行も南嶽に住したが、目録のみで詳しくは明らかでない。ただ『南嶽總勝集』に、般若寺には堅固玄泰の二塔があると述べている。別に慧能の弟子にしておかねばならぬ点である。伝燈錄では衡嶽の般若寺に入つたとし、宋高僧伝では觀音台に入ったとする。觀音台と懷讓の最勝輪塔は峯一つ距てたところである。般若寺は制空禪師を礼したといつている。制空山が明らかでないが、これで道進が南嶽に住していたことが明らかとなる。嵩山普寂の弟子の明瓊は南嶽に閑居した。彼は衆僧が營作していくも晏然としていて、たとえ罰せられても恥じなかつた。それで懶瓊と呼ばれた。そのようであつたのでいろいろに評されたようで、瓦釜でもつて土を煮て食べたと

もいうし、阿弥陀仏の應身ともいわれ、或は残食を好んで食べたので懶残とも称せられ、話しかけると答えてくるが、それは仏理に契つていたともいわれる。天宝初（七四二）南嶽に来て役を執り、昼は一寺の中心となつてきり回し、夜は牛の中に眠るという生活を二十年続けた。<sup>(22)</sup> 李泌（七二二—七八九）が崔円李輔國の害を避けて南嶽に隠れていた時、明瓚の所業を見て常人にあらずと知り、ある夜彼のもとに行つた。彼は牛糞火の中から芋を取り出して食べ、李泌に半分与え、宰相の位につくだらうが、このことは多言をするなといさめた。李泌はいよいよ丁重を加えた。巨石が道路に墮ちたのを簡単に取り除いたこともあって、人々から神異の人とみられた。李泌は後に明瓚の懸記のように、宰相の位に就いた。このようなこともあって郡守は至聖とあがめたが、明瓚は却つて立ち去る決意をし、虎の害に悩む人々のため、虎をつれてそのまま姿をみせなくなつた、という。大明禪師と謚する。『南嶽總勝集』卷上には煙霞峯の東に李泌の端居室及び嬾残巖があると記す。<sup>(23)</sup> また卷中に衡嶽禪寺に住していいたとする。嬾残巖は大明禪寺の東にあるのである。『景德伝燈錄』卷三十に『南嶽嬾瓚和尚歌』を載せている。任運無事を詠んだ歌である。明瓚は

普寂下とされるが、南嶽という風土が北宗の殻を破らせているようでもある。そして北宗が必ずしも一樣でなかつたのであらうこととも知られる。しかし上述の宋高僧伝における明瓚の記述にも、よくみると明瓚の二つの顔が併記される。一つは雲衲を統率し寺務に専念する姿と、一つは嬾残と称されるような任運に日を過ごす姿である。この記述は僧伝類にままみられるような、相反する性格を併記するものである。それが南嶽で生活する中で変化していくのか、南嶽という環境に合せた表記なのか、或は南嶽嬾瓚和尚歌などの影響によって伝訛したのかは審らかではない。李泌に対する予言という形で示されるように、都の政治的動静を洞察するなど、決して単なる隠逸風狂の人ではなかつたろう。李泌はかつて玄宗に老子を講じ、東宮（肅宗）に仕えたのであるが、崔円李輔國の禍を避けて衡山に隠れ、隱士となつた。それは帝より三品の祿を給されながらのものであった。無用な抗争を避けんとするものであつた。代宗が立つに及んでまた都に帰つたのであるが、明瓚との出合いは南嶽に隠棲中のことであった。宇井伯寿氏は『宗鏡錄』卷九十八に、明瓚の語を数句引用していることを指摘されている。

神秀下降魔藏の弟子の慧隱も南嶽に住したが詳しいことはわからない。また弥陀和尚<sup>(26)</sup>（七二一—八〇二）と呼ばれた人が南嶽の弥陀寺に住していた。代宗の時の国師法照がその弟子で、それで都に知られた。弥陀和尚は一時資州處寂（唐公）に学んだことがあったので付記しておく。

荷沢神会の弟子皓玉も南嶽に入っている。衡陽の太守王展が傾倒した。七八四年入塔し、八十余歳であったというから、七〇〇年代のごく初めに生まれ、七八〇年の初めに入寂したのである。石頭とほとんど世代を同じくする。更に神会の弟子の澧州慧演（七一八—七九六）もはじめ南嶽に住している。慧演は湖北襄陽の人で、幼少にして開元寺の弁章法師のもとに出家し、涅槃經を学んだ。深義に通じ、そしてまた講じた。後に洛陽に出て神会に参じた。その後、南嶽に住し、澧陽に移住した。江南にはこの人に学んだ者が多かつたといわれる。この人も石頭とほぼ世代を同じくする。石頭の『參同契』に「道に南北の祖なし」というのは、神会の南宗北宗の甄別に対する批判とも受取ることができる。それは皓玉、慧演の荷沢宗に対して、別の立場にあることの表明とみてよからう。慧演が涅槃經に通じ学問的なものであつたから、涅槃經に造詣深い理論的な神会

に自然に契合する。それに対する慧能、青原を受けた石頭には、決して仏教学が表面に出てくることがない。明らかに荷沢宗とは別の歩みをはじめているのである。慧演が澧陽に移つたことについて、石頭の禅との衝突を避けたからと理解したならば穿ち過ぎとなるであろうか。

この地方の禅宗の開拓期において、南嶽懷讓と共に最も注目すべきは石頭希遷（七〇〇—七九〇）である。石頭は本貫は端州高要（廣東高要県）で、性格はもの静かで人の言葉を受け入れて逆らうことがなかつたが、郷人が鬼神を恐れて犠牲を供える風習には強く反撥し、祭場から牛を牽いて帰つてくることが屢々であった。慧能が五祖の心要を得て南に帰つたことを聞き、往つて学んだ。慧能の寂年は七一三年だから、十四歳の時入寂に会つたことになり、従つて参学は短かつた。そして羅浮山を往来し、三峡を往来した。七二八年二十九歳で羅浮山に授戒した。羅浮山は廣東の増城県東にあり、<sup>(27)</sup>東晋の葛洪が仙術を得たところとされる、廣東の名山である。また道信の師が住したところでもある。石頭は廬陵青原山（江西吉安）の行思（一七四〇）が慧能の補處であると知つて参じた。行思が入寂したので、天宝初（七四一）に衡山の南寺（南台寺）に往き、寺の東の石

の台状の所に庵を立てて住した。それで石塔和尚と称されるのである。寺は廟の北十五華里、天柱峯の中腹にある。これより先、堅固、明瓚、懷讓が南嶽に住して、いたが、こもごも、石頭は眞の師子吼である、と評したという。江西の馬祖、湖南の石頭は二大士といわれ、雲衲はその間をさかんに往来した。江湖会という語もここより発する。学人が解脱を問うと、誰が縛しているのかと答え、淨土を問うと、誰がおまえに罪をつくるせているのかと答えるように、簡明迅速であった。七六年には門人招提慧朗の請を受けて、梁端（潭州）に往っているが、恐らく一時的なものであつたろう。門人の慧朗、振朗、戸利（又は波利）、道悟、道銑、智舟らが塔を東嶺に立てた。『南嶽總勝集』<sup>(28)</sup>では楚寧寺（廟の西十五里）は石頭の瘞骨の処といつて、長慶中（八二一～八二四）道銑の要請で劉軻が碑文を撰した。南嶽總勝集では劉軻の撰した碑も南台寺にあるといふ。ところで總勝集では裴休<sup>(29)</sup>の書した碑が山のすそにあるといふ。劉軻と裴休の二碑があつたことをいう。『支那仏教史蹟評解』<sup>(30)</sup>四では、光緒三十一年（一九〇五）の「重修南台寺記」の碑文を引いて、「清朝に入りて後、乾隆嘉慶の八十余年間、道法の陵夷に乗じて不肖のもの、寺産を岳廟

の西廊に移して、各私奨を建て、老南台と曰ひ、新南台と曰ひ、古刹名藍をして榛莽に沈淪せしめたり。此時、遷祖の一塙もまた湮没し、其後心あるもの、百方之を探るも、遂に之を彷彿するを得ざりき。偶々光緒十六年（一八九〇）、僧妙見、西蜀の馬福臣大令と共に、福嚴寺に遊び、思祖塔を礼し、南台の遺址を訪ひ、一巨石缸の尚存するを見、乱石を掀かして、唐相裴休の書せる碑文、唐勅諡無際禪師見相宝塚と載せたるを得たり。」と述べている。このことからすれば、長慶中の劉軻の撰文の折に諡号塔名を賜つたとする伝燈錄とは異なり、裴休の建碑の折、宣宗（八四六～八五九）から贈られたとする南嶽總勝集と同じである。しかし『支那仏教史蹟踏査記』では、「劉軻が碑を撰して徳を記し、朝より無際大師見相塔の諡号が加へられた。」<sup>(31)</sup>と記して、劉軻の時であるか、裴休の時であろうか。考へるに劉軻の時のように思われる。というのは、八一七年には興善惟寛、八一八年には鷲湖大義に諡号を賜わり、元和中（八〇六～八一〇）に馬祖が大寂禪師の追贈を受け、八二一年には西堂智藏、百丈懷海も賜わり、八一五年南嶽懷讓の塔が建ち、寶曆中（八二五～八二七）には大慧禪師と諡号を賜つてゐる。また八一五年には南海經略使馬總

が上疏して曹溪六祖に勅して大鑑禪師靈照の塔と謚せんことを請い、柳宗元が碑文を撰したことを『仏祖統紀<sup>32</sup>』では言っている。更に下つて八四年寂の雲巖曇晟には無相大師と賜つている等々であるこの現実を見る時、馬祖に少し遅れて石頭が謚号を贈られたとするのが妥当と思われるからである。宣宗の復仏後とするにはいかにも遅すぎる。そしてそれは弟子の道銑、撰者劉軻の朝廷に對する働きかけによるところが大きかったと考えられる。馬祖石頭寂後三十年、それの派下に法脈の意識が顯在化してきたとみるべきである。石頭に『參同契』『草庵歌』があり、多くの人々に愛唱される。

劉軻<sup>34</sup>について付言するならば、本貫は曲江で、字は希仁といい、元和末進士に進み、文宗朝（八二六—八四〇）宏文館學士となり、出でて洛州刺史となつた。そして累遷して侍御史となつた。馬植はその文は韓愈の流亞と称した。「与馬植書」がある。玄奘の塔銘（開成二年、八三七）や、智滿律師、棲霞寺曇珉、廬山東林寺上宏の塔銘（元和十年、八一五）も著わしている。石頭の碑文を撰したのは同郷といふ關係からであろう。

【澧州】（澧陽郡）澧州は洞庭湖の西側に位置する。ここ

はさほど禅宗の盛んなところではなかつた。湖南を南北に縱断する湘江からはずれ、楊子江を利用して北に通ずる東西の交通路及び湖北の漢水を利用して北に通ずる南北の交通路から少しほずれるためであろう。しかし独り早く前述の澧陽慧演が住している。そして慧演に学んだ者が江南に多かつたといつてはいる。江南とは一般に江蘇安徽地方を指す。江南道をいうとすれば、楊子江の南側の江蘇、浙江、安徽、江西、湖南及び貴州の一部を含めた広範囲になる。しかしこの場合、このどちらでもなく、むしろ澧陽を中心とした楊子江の南側に散つたと解すべきではなかろうか。南嶽から長沙に伸びんとした石頭の教線に對するものとしての江南ではなかろうか。

### 三 伸張期の殷賾

湖南地方は開拓期には潭州（長沙）よりむしろ衡山に人が集まつたのは、聖なる山という一面があつたからであろう。しかし伸張期に入ると潭州が禅宗の中心地となつていくのである。

【潭州】南嶽澄心（七二七—八〇二）は『景德伝燈錄』で、嵩山普寂の弟子として目録に名のみを載せるが、『宋高僧

伝』卷二十九には伝を載せている。それによれば、俗姓朱氏、江蘇東海県の人で、父は濟源（河南懷慶府に属する。洛陽の北方、黃河の北側である）の県令であったが、安史の乱で死んだ。安祿山は天寶十四載（七五五）十一月反乱を起こし、十二月三日にはもう東都洛陽を陥れているから、父の死はこの頃のことであつたろう。澄心が二十九歳の時であった。母と共に河南にのがれ、極貧の中にあつた。母が人に嫁したのを澄心はよろこばず、応福寺の智明法師に投じ、登戒の後、神秀の高足の門下に学んだ。そして衡嶽に留まつたのである。太守の吳憲忠は州治の長沙に召したが赴かず、再度の命で竜興寺に住した。常に問法の徒が方丈に満ちていたという。貞元十八年十一月寂し、その月の二十七日に入塔した。竜興寺は万福禪林のこと<sup>(36)</sup>で駅歩門内にある。旧王城の西北にある果園の荒地であった。<sup>(37)</sup>伝燈錄では普寂の弟子としているが、宇井伯寿氏も指摘するように、澄心が出家した時、疾うに普寂は寂していたから、伝燈錄の誤りである。普寂の弟子に師事したのであろう。動亂の後、北方から南方に流入した例である。吳憲忠という人がわからぬが、北宗系である澄心を請したことからも、都長安とつながりのあつた人ではなかろうか。

慧能から回田善快そして回田善悟と嗣承し、その善悟の弟子無學が廣東韶州下回田より潭州に入るが、目録のみで具体的な住地は不明である。また慧能から韶州祇陀そして衡州道倩と嗣承し、道倩に学んだ如宝が湖南に入る。この人も目録のみでくわしいことは不明であるが、湖南とは長沙付近を指すのであろう。如宝は寺名かもしれぬが、そのような名の寺は今のところ見出していない。潭州無學が廣東より流入しているように、まだ幾分、廣東より北上する流れがあつたようである。

石頭の弟子慧朗（七三八—八二〇）が潭州の招提寺に入る。廣東始興曲江の人で、十三歳鄧林寺に出家し、十七歳南嶽に入り、二十歳嶽寺<sup>(39)</sup>で受具した。そして江西虔州の龔公山の馬祖に仏知見を求めて参じた。馬祖は、仏に知見なく、知見は魔界であると指摘し、南嶽にいながら、曹溪の嫡嗣石頭に参じていらない点を難じ、石頭に学ぶことを勧める。ただちに石頭に参じて仏性を問う。石頭は蠢動する含靈に仏性を認めて、慧朗になきを喝破する。それは「汝が承当を肯んぜざるがためなり」と。言下に信入し、後に梁端の招提寺に三十年住した。石頭は廣德二年（七六四）「門人に請われて染（潭州）に下る」というから、この門人がま

さしく招提慧朗なのである。このことより石頭が一時期長沙へも教線を伸ばしていたことが知られる。慧朗は招提寺を三十年出ず、参考者にはつねに、「ゆき去れ、汝に仏性なし」と応じたという。五祖が六祖に述べたとされる言葉と全く同じで、南宗がつねに仏性を問題としていたことがわかる。<sup>(40)</sup> この仏性問題は、積極的に述べれば、南宗の中思想である即心是<sup>(41)</sup>仏に外ならない。余靖（一〇〇〇—一〇六四）の「韶州月華山花界寺伝法住持記」によれば、劉軻が碑をつくり、そこに慧朗のことが詳しく述べられていて、大とか小とかは体格の大小ではなくて、年齢の老若である、という。そして余靖はそれにもとづいて略記したのであろう、その内容は今述べた伝燈録の記事と一致する。故に伝燈録は劉軻の碑文にもとづいて記しているのである。

劉軻は石頭、丹霞、東寺、南泉の碑文を撰した人である。曲江の生まれであるから、六祖の風を伝聞していたであろう。花界寺伝法住持記では、石頭が寂して後、正元（貞元？）十一年（七九五）羅浮に遊ぶ途次、曲江の月華山花界寺に住し、四方の学者が風聲を尋ねて虚日なきほどであったが、寂して後、百年の間は荒れてしまつたことをいう。「正元」の寂後花界寺に住したということより、貞元の誤りのよう

に思われるが、実のところ誤りではなくて、仁宗（一二一〇六三在位）の諱の禎を避けたのである。慧朗は晩年は郷里に帰つたのであった。

石頭の弟子の振朗も潭州長沙に入り、興国寺に住した。招提慧朗は大朗と呼ばれ、興国振朗は小朗と呼ばれていた。大とか小とかは体格の大小ではなくて、年齢の老若である。例えは古林清茂を大茂といい、その弟子を松隱小茂というがごときである。竜冊道愆を小愆布衲<sup>(42)</sup>というのは、太原に同名があつて、その人の方が年齢が高かつたからである。また神秀の弟子義福が大福と呼ばれ、また小福<sup>(43)</sup>と呼ばれる人もいたが、これも年齢または法臘によるものと思われる。興國寺は位置が定かでないが、長沙であろう。

また潭州華林も石頭の弟子で、寺名をもつて呼ばれる人である。華林山は善化県西六十里にあり、華林寺は県の西十六都にある。そして馬祖の弟子の華林善覚が住したところ<sup>(44)</sup>である。ところで潭州華林と華林善覚とは別人であるが、伝燈録からすれば別人のことくみられるが、時代も同じであり、同一人の可能性が濃い。ただしどちらにしても最晩年の弟子である。華林善覚に夾山（八〇五—八八一）や裴休が参じてゐる。觀音信仰の人である。百丈下にあつ

て第一座となり、その頃司馬頭陀が鴻山の地に人を求めて百丈に推薦を求めて来た。司馬頭陀は鴻山と華林を勘弁して、そこで鴻山を選んだと伝燈錄では言つている。しかしこの一件は実話とはみられない。理由は鴻山のところで記す。

また潭州大川は大湖とも呼ばれ、これも石頭の弟子で、山名をもつて呼ばれる人である。大川山は攸県北百里にあり、山は聳峻であるが、川原が開け広まっているので名づけられる。<sup>(46)</sup> そこに慈雲寺がある。唐の檜樹禪師が建てたと<sup>(47)</sup> いう。また一方では廣德間（七六三～七六四）閩僧の良橘が入山して建てたという。この檜樹禪師即ち良橘と大川との関係を証しがたいのは残念である。また別に大湖とも呼ばれるが、これも山名で呼ばれるわけである。大湖は巨湖山のことであろう。巨湖山は瀏陽県西一里にあり、太湖山とも名づけ、西湖山ともいう。三峯鼎峙し、中に巨湖がある。<sup>(48)</sup> 大湖とは太湖で、大川は太湖山にも住したのである。

伝燈錄の大川章に江陵の僧との問答が一話あり、大川はその僧の語を肯うが、丹霞は峻別し、錯つて諸方を判する者が多い、と批判している。洞山は、丹霞でなければ玉石を分ちがたいと評価する。

長髭曠も石頭の弟子である。曹溪に往つて祖塔を拝し、

それから石頭に参じた。石頭の点検に、洪鑪上一点の雪の如し、と答えて、無為無作の功德を述べる。潭州攸県に住した。攸県の東江郷に保寧寺という寺がある。長髭曠が建てたといわれる。ここに住したのであろう。長髭といわれるには髭を長く伸ばしていたに違いない。禪僧は好んでこんな呼び方をしたようで、例えば、連眉禪師、赤脚禪師（はだしの和尚さん）、赤眼帰宗、長耳（耳相）行修、鳥窠禪師、岑大蟲、懶融、懶瓊、懶安、紙衣和尚、草衣和尚、米七師、謝三郎、王老師、陳老師、馬祖、長松馬、馬素、唐和尚、金和尚、司馬頭陀、鄧隱峯、密師伯、大朗、小朗、老安、船子德誠、小釈迦、跛脚驅鳥、布袋和尚、陳蒲鞋、神力和尚、騰騰和尚、兀兀禪師、憨憨和尚等おもしろい呼び名が多い。この辺は教宗と違った禪宗の人間味の豊かさがよくあらわれていて。

東寺如会（七四四一八二三）は廣東韶州始興の人で、七七年徑山法欽の門下にとどまり、七六年徑山が入内するので衆を散ぜしめたがためであろう、洪州開元寺の馬祖の門に投じた。当時禪僧が仰慕殺到し、僧堂の禪床が折れてしまつた。その繁栄のさまを評して折床会と号した。後に湖南の東寺に住した。その盛んなさまは他に敵うものな

く、東寺は禪窟と号された。折床会を東寺のこととするは誤りである。湖南觀察使崔群<sup>(50)</sup>が風を慕つて謁している。崔群<sup>(51)</sup>（七七二十八三三）は憲宗皇帝の尊号を議する中で、皇甫鏃に譖言せられて帝の怒りに触れ、八一九年十一月湖南觀察使にさせられた。人々は皇甫鏃に切歎した。翌年六月には吏部侍郎になつた。故に如会に謁したのは八一〇年も前半のことであると知られる。八二三年八月、八十歳で入寂した。伝明大師と謚し、永濟塔と号する。劉軻が碑を著した。李翹は近城の墳塔を尽く毀したが、如会の塔には触れず、「独りこの塔のみ留めて、以つて賢愚を別つ」と題したといふ。『宋高僧伝』で如会について、夾山和尚となすか、というが、夾山善会も伝明大師永際塔といわれたとするので、「会」和尚の共通から、混乱を招いてゐるのである。『祖堂集』は東寺について号と塔名をいわない。謚号塔名が東寺のものが、判然としない。ところで東寺というのがどこかわからない。祖堂集は潭州に在りといふ、宋高僧伝は長沙東寺とする。しかば長沙にあつたのである。

百丈に嗣いだ靈祐（七七一—八五三）が寧鄉県西百五十里にある大鴻山に住し、湖南における禪宗の一大拠点を形成した。靈祐については鴻山という呼び名が一般的で、まま大鴻とも称する。大鴻山は五代時代には湖南地方の仏教の全般的凋落と軌を一にするが、宋代に入ると復活して一大叢林を形成する。そのため、宋代には鴻山の再評価もなされ、系譜が途絶するにもかかわらず、鴻仰宗の祖として、名声を博する。宋代に入ると大鴻という呼び方が一般的となる。

鴻山は福建の福州長溪の生まれで、今の霞浦県擢秀里華峯下城東二里にある建善寺の法常（法恒）律師によつて、十五歳（七八五）で出家し、浙江杭州龍興寺に受戒した。そして錢塘（杭州）の義賓について大小乗の律を学んだ。智者大師の遺跡を礼せんがために遊方して天台山に入り、寒山子から「潭に遇わば止まれ」との記を受けた。國清寺でも拾得に遇つて同様の言を受けた。二十三歳（七九三）、江西の靖安県の石門山泐潭寺で馬祖の塔を守る百丈懷海に遇した。そしてついに祖意を了じた。宋高僧伝は元和末（八二〇）長沙に往き、ついで大鴻山に入ったとする。伝燈錄では「宗教を敷捨すること凡そ四十余年」とするから、八一〇年頃鴻山に入ったと解している。武宗の澄汰にあい、首をつぶんで民衆に混じた。しかし識者は益々尊重した。

大中七年正月九日入寂した。寿八十三。盧簡求が碑文をつくり、李商隱が額に題した。寂後十一年（八六三）謚号が加えられ、塔名を賜った。大円禪師清淨塔という。それを紀するため咸通六年（八六五）塔を作った。鄭愚は塔銘を依頼されたが病氣のため延びて、翌年二月「潭州大鴻山同慶寺大圓禪師塔銘并序」<sup>(53)</sup>が撰せられた。鴻山の寿齡が八十三歳であったことは皆共通するが、臘についてはまちまちで、しかもいざれを是とするか決しがたい。従つて上記の百丈に参じた年も確実であるとは言い難い。

人煙を絶した大鴻山が発展したについては、有力な外護者があつたからに外ならない。鄭愚もその一人であるが、鴻山はまず裴休と交渉があつたことが宋高僧伝に記されている。裴休は裴肅の子で、字は公美、本貫は河内濟源県である。長慶中（八二一～八二四）甲科に及第し、太和初（八二七）監察御史右補闕、史館修撰となり、会昌中（八四一～八四六）尚書郎より数郡を歴典した。大中初（八四七）戸部侍郎に累官し、同五年諸道塩鐵転運使に充てられ、転じて兵部侍郎兼御史大夫となつた。同六年八月、本官を以つて同平章事判使となつた。江淮の米が渭河倉に届くのはたつた四十万斛に過ぎず、漕吏の腐敗を正すため、新法十条を

奏行し、税茶十二条を奏行して、三年後に漕米は百二十万斛に増した。そして中書侍郎兼礼部尚書に累転した。五年間宰相を勤め、大中十年（八五六）罷めて檢校戸部尚書汴州刺史御史大夫となり、六月宣武軍節度使に充てられた。翌年冬檢校戸部尚書潞州大都督府長史御史大夫となって昭義節度磁邢洛觀察使となり、十月檢校吏部尚書太原尹北都留守河東節度觀察等を加えられ、同十四年八月本官を以つて鳳翔尹を兼ね、鳳翔隴州節度使に充てられた。咸通初（八六〇）入つて戸部尚書となり、吏部尚書に累遷して、太子少師をもつて七十四歳で卒した。裴休は性格が寛恵、文章に長じていた。一族は仏教を重んじたが、休が最も仏理を深く解していた。暇があれば山林に践み入つて義学僧と仏理を講求し、中年後は葷血を食わず、常に斎戒していた。裴休には圭峯宗密（七八〇～八四一）との交渉もあり、会昌以前より仏教に深く傾倒していたのである。裴休が鴻山と関係を持つのはいつごろか、そしてどの程度であつたかは明らかでない。恐らく会昌中、数郡を歴典した頃からそれ以後のことと思われる。黄檗と裴休が交渉を持った頃と同時期であろう。

次に李景讓がいる。景讓は進士第に登つてより、宝曆初

(八二五) 右拾遺に遷つた。淮南節度使王播が錢十万で朝廷の歛を得て塩鉄を領せんことを求めたが、景讓は諸朝臣に不可なることを論じ、それで名が知られるようになつた。沈伝師が江西觀察使となつた時に副となつた。太和中(八二七) (八三五) 尚書郎となり、出でて商州刺史となつた。開成二年(八三七) 中書舍人となり、同年十月華州刺史潼関防禦鎮国軍使となつた。四年礼部侍郎となり、右散騎常侍、そして会昌六年(八四六) 九月浙西觀察使となつた。大中中(八四七) (八五九) 襄州刺史、山南道節度使となり、入つて吏部尚書となる。大中十一年(八五七) 御史大夫に転じた。宣宗は宰相を投票で群臣に選ばしめたが、景讓の名がなく、恥じて、出でて西川節度を拝し、病をもつて致仕した。七十二歳で卒した。宋高僧伝では、襄陽の連率李景讓が湘潭を統摶して良縁に預ることを願つた、と言つてゐるから、大中中のことであると知られる。しかし大中七年には渦山が入寂しているのであるから、自ずと時期は限定される。景讓の上奏で、同慶寺と名を賜つてゐる。

更に崔慎由<sup>(56)</sup>がいる。慎由は太和初(八二七) 進士第に擢んでられ、大中初(八四七) 朝に入り、右拾遺員外郎知制誥となり、中書舍人を拝し、翰林学士に充てられた。そして出

て湖南觀察使を授けられ、召還せられて刑部侍郎になつた。次いで浙西を領し、戸部侍郎に遷り、大中十年(八五六) 六月工部尚書中書門下平章事となつた。蕭鄴と隙あり、出でて東川節度となる。大中十二年宣宗の太子を立てる件で憎まれて罷めた。咸通初(八六〇) 華州刺史に徙り、河中節度使となり、吏部尚書を以つて官を罷めた。崔慎由についてもやはり大中中湖南觀察使であった時に、渦山に帰依したのであろう。李景讓に続いてのことと思われる。

盧簡求<sup>(57)</sup>(七八九一八六四) は渦山の碑文を撰してゐる。簡求は長慶元年(八二二) 進士に登第し、はじめ江西の王仲舒の幕府にいたが、裴度、元稹に召され、牛僧孺が襄陽を鎮めた時佐けたので、入つて戸部員外郎となり、会昌中、劉稹を討ち、忠武節度使李彦佐をもつて招討使とし、簡求を副とした。後務を知られ、蘇寿二州刺史となり、大中九年(八五五) 涇原渭武節度使を拝した。そして義武鳳翔河東三鎮に移つて致仕し、洛陽に帰つた。咸通五年十月、七十六歳で卒した。盧簡求が渦山の碑文を撰したのは依頼によるのであろう。渦山を直接知つてゐるということではなかろう。また塩官齊安の碑文(『全唐文』七七三) も撰した。

李商隱が盧簡求の碑文の額に題してゐる。李商隱<sup>(58)</sup>(八一

二？——八五八）は字は義山、懷州河内が本貫である。太和三年（八二九）令孤楚の幕に従い巡官となつた。同六年科挙に応じたが賈鉢に斥けられ落第し、令孤楚に従つて太原に赴いた。同八年再度科挙に応じたが崔鄆に斥けられて再び落第し、袁海觀察使崔鄆に招かれて章奏を掌つた。開成二年（八三七）令狐綯の力により進士科に及第した。翌年王茂元に招かれて涇原に赴き、その娘を妻つた。宏詞の試に応じたが落第した。四年秘書省校書郎となり、弘農尉に調せられた、五年（八四〇）辞して楊嗣復の招きに応じて潭州に遊んだ。翌会昌元年長安に帰り、王茂元の陳許の幕に居り掌書記となる。書が巧みなので抜擢せられて秘書省正字を授かつた。四年鄭州に返った。翌五年十月秘書省正字に戻つた。大中元年（八四七）鄭亜に随つて桂林に赴き掌書記となる。冬、使を奉じて荊州に往き、翌二年昭平郡事を摂守した。三年盧弘正が徐州に鎮し、その判官となつた。五年入朝し、令孤綯の力により太学博士に補せられた。河南尹柳仲郢は東蜀に鎮し、節度書記となした。十月幕中にて検校工部郎中にうつり、冬、推官として西川に赴いた。六年梓州に帰り、七年樊南乙集を編み、この年に「唐梓州慧義精舍南禪院四証堂碑銘」を撰している。十年柳仲郢に従つて

長安に帰り、ついで仲郢の属官の塩鐵推官となつた。十二年鄭州に帰り、間もなく病死した。この履歴より李商隱の題額は大中七年から十年の梓州にいた時に、禅に親しみ能書家であったことから、依頼されて書いたものと思われる。しかも宋高僧伝では盧簡求について、「四鎮北庭行軍涇原等州節度使右散騎常侍」との官名を記するから、この官名から、大中九年以降となり、結局大中九年から十年に撰せられたというように絞られてくるのである。

景德伝燈錄では次のことを記す。司馬頭陀が鴻山に住する人材を求めに来た。百丈が自分はどうかと尋ねると、百丈は骨人で、鴻山は肉山だから合わない旨をいう。百丈が第一座の華林善覚を呼んで会わせるが、咳払いして数歩して不可なるをいう。次に典座の鴻山を呼んだ。司馬は見くなり、この人こそ鴻山の主だといった。百丈は鴻山に囑託した。華林が自分は上首にいるのにどうして鴻山を選ぶのかと詰問した。そこで百丈はよく衆に対して出格の一語を下し得れば住任せよといい、淨瓶を指して、淨瓶と言わずには何と喚ぶか、と質問する。華林は木棟とすべからず、と答える。百丈は肯んじない。次に鴻山は淨瓶を踢倒した。百丈は笑つて、第一座は山子に輸却された、と言つた。この

話は史実として認められるかどうか。前述のごとく伝燈錄では「宗教を敷揚すること凡そ四十余年」と言つてゐるから、入寂年から逆算して八一〇年代前半に鴻山に入山していることとする。宋高僧伝では元和末（八一〇）長沙より大鴻山に入つて棲止せんとした、という。盧簡求は鴻山の寂後二乃至三年に碑文を撰したのである。依頼による撰文といふことで、内容面での不確実さは多少あるかも知れないが、やはり盧簡求の碑文が第一資料となるべきで、それに基づく宋高僧伝を尊重せねばならない。次に入寂十二年後に書がれた鄭愚の碑銘も、直接鴻山に参じていたこともあって、重要資料である。この両碑には伝燈錄に載せる司馬頭陀の人選依頼の件はない。勿論このような話は碑銘に載せるには適さぬ内容であろう。要は靈祐が大鴻山に入るのは何年かということである。百丈（七四九—八一四）存命（八四九—九〇一）に入寂したとするのも正しくなく、会昌元年（八四一）であった。地名の雲巖は茶陵州（攸県）の東三十里にある。一名靈巖といふ。会仙峯下に石室があり、それが靈巖である。<sup>(60)</sup> 石室は方二丈程である。<sup>(61)</sup> ここに洞山、神山、石霜らが参じたのであった。寂後無相と謳し、塔を淨勝と名づけた。雲巖が寂して数年後に石室善道が住した。雲巖は胎衣でもつて生まれてきて、右袒して袈裟のようであつたということについて、贊寧は、叔離尼や商那和修尊者が胎衣であつたのと比較することは思い半ばに過ぐと批判し、馬頭陀の人選の話は事実のことではないとみるのが妥当の

ようである。そして鴻山は百丈の入寂後、百丈山を去つて遊方する間に、湖南に向つたと思われる所以である。鴻山では仰山、香巖、大安等が学び、一派を形成していった。「藥山の弟子雲巖曇晟（七八二—八四二）は藥山を嗣いで雲巖山に入った。雲巖については宇井伯寿氏『第三禪宗史研究』に詳しい考証がなされているから贅言を必要としない。江西鍾陵建昌の人で、石門山の百丈懷海（七四九—八一四）のもとで出家し、隨侍したが契わらず、百丈の寂後藥山に参じたのであった。『祖堂集』が道吉円智を肉兄とするのは誤りである。また『宋高僧傳』が雲巖は太和三年（八二九）に入寂したとするのも正しくなく、会昌元年（八四一）であった。地名の雲巖は茶陵州（攸県）の東三十里にある。一名靈巖といふ。会仙峯下に石室があり、それが靈巖である。<sup>(60)</sup> 石室は方二丈程である。<sup>(61)</sup> ここに洞山、神山、石霜らが参じたのであった。寂後無相と謳し、塔を淨勝と名づけた。雲巖が寂して数年後に石室善道が住した。雲巖は胎衣でもつて生まれてきて、右袒して袈裟のようであつたということについて、贊寧は、叔離尼や商那和修尊者が胎衣であつたのと比較することは思い半ばに過ぐと批判し、時代の相違、教化対象の相違を挙げている。現実的な判断

のようであるが、そうではなく、正像末の三時を背景にいた判断で、その点禪宗の立場からすれば、意見は異なるものとなる。というのは、禪宗は一般的に三時をもつて判決しないからである。

雲巖曇晟の寂後、続いて雲巖に入るのは、長髭曠を嗣いだ石室善導である。善道とも書く。善導は十歳で長髭のもとに養われ、その後沙弥として過ごした。十八歳のある日、善導は受戒したい旨を申し出た。長髭は二十歳にならねば受戒できないことを告げるが、はたと察して許す。そして石頭に立寄るべきことを指示する。南嶽般若寺で受戒し、石頭に参じ、大悟して受業師のもとに帰る。誰によつて受戒したかの間に、「他に依らず」と答えている。その後長髭と同じ攸県の、雲巖の石室に住する。武宗の沙汰に会つて行者となり、ついに復僧しなかつた。沙汰の前後で、禪僧はそれぞれの態度を取るが、石室の態度は典型的である。受戒は他に依らずといつた姿勢がそこに出ている。他律的な小乗戒律に対する不満は禪僧に多くあつた。受戒の時、戒律の学習研究がなされるのであるが、僧の中には、相部律なり南山律なりにしても、それにあきたりず、禪宗に走つた者の何と多かつたことか。律に代るべき

清規がどうしても必要であったのである。彼のもとに三聖、杏山、仰山など尋ねてくるが、杏山との問答は、戒律を乗り越えた者の自由さがある。杏山が僧衆をつれて石室のところにやつて来たのを見て、石室は潜かに米を碓いて僧衆に供養する。杏山がひどく恐縮すると、石室は「無心の椀子に盛りもち來たる。無縫の合盤に合取し去れ。なにをもちい難しと説くや。」と言う。杏山は言葉もなかつたのである。

道吾円智（七六九—八三五）は薬山を嗣いで、潭州瀏陽県の道吾山に住した。道吾の本貫は江西予章海昏県（海昏とするは誤り）である。祖堂集が鍾陵建昌とするのは、雲巖の肉兄であるという一つの伝承に添つたためで、正しくない。道吾は幼年に百丈涅槃（法正）について出家し、受業し、受戒した。後に薬山に参じてその心決を示した。そして瀏陽県の北十五里（又は十里）にある道吾山に入り、道吾寺を創建して住した。太和九年九月十一日入寂した。闍維して石霜山に塔を建てた。脳蓋の舍利は金色にかがやいていたという。以つて円智と名づくるにふさわしく、とりわけ頭脳明晰であつたことを比喩する。嗣法の時、薬山は、宝玉や大弓などで分器たることを表わせないが、犢鼻（禪）

を一腰おくろう、といつたという。袈裟の授受によつて正統非正統を判別せしめんとした初期禅宗の師資相承論は、ここに完全に払拭されたのであつた。そして牛欄より發足した薬山寺の質素な生活が偲ばれるのである。

『祖堂集』では、慶諸が石霜山に入るのは八四一年とするから、この説によれば道吾の塔が建てられるのはこのころのことになるうし、また『景德伝燈錄』石霜章の、道吾が、順世せんとする時、石霜を嫡嗣とし、衆を捨ててみづから石霜山に至つたといふことからすれば、石霜が石霜山に入るには道吾の入寂以前であつたということになる。しかしこれらの点については検討を要する。下の石霜のことから再度触れるであろう。末期の病苦に際し、弟子たちが体候を慰問すると、受くることはあつても償うのではない、と述べ、二祖償債という類のとらえ方に否定的見解を示し、吾れまさに邁くべし、理、東に移ることなし、と言つて入寂した。この入寂の際の言葉の一つの取り方として、道吾は道吾山で入寂し、石霜は意を体して、道吾山の西南にある石霜山に建塔したとみることも可能で、道吾の入寂地を石霜山と決めてしまふこともできない。修一大師実相の塔（宋高僧伝は宝相）と謳する。石霜の弟子南嶽玄

泰が碑文を撰した。  
漸源仲興は道吾の弟子で、潭州に住した。『祖堂集』と『伝燈錄』とは録する内容もほぼ同じであるが、檀越の家の葬儀に際しての生死の問答には、伝燈錄の方に師の道吾を打つという発展がある。『祖堂集』の方が素朴である。後にある日、漸源は鍬をもつて石霜山にやつてきて、法堂の前を往きつゝ戻りつしていた。先師（道吾）の靈骨を求めて来たというのである。石霜は、洪水が大波をたてて天をうつ（ような）宗風で、鍬など入れられまい、と答える。漸源は、それなれば力一杯あるえる、という。石霜は、ここは針をも通さぬところだ、どこに力一杯あるえるというのか、と述べる。石霜の言葉の中に道吾の宗風がよくあらわされていいる。

石霜山は瀏陽県西南八十里にある。霜華山ともいう。山は険しく、水が激しく、石にぶつかって霜を噴くというので名づけられている。<sup>(65)</sup> ここに石霜寺がある。石霜慶諸に至つてここは湖南地方の禅宗的一大拠点となる。しかしそれ以前に、馬祖の弟子の大善が住していた。一本に石竜大善というが、石竜という山は見当らず、誤りであろう。かつて洞山はここで大善に学んでいた。百丈の弟子の性空も吉

州にあつたけれども、一度は石霜山に住したようである。

石霜慶諸（八〇七一八八八）は江西廬陵の新淦県玉笥郷の生まれで、代々役人とはならず、世の棚に拘束されることなかつた。十三歳、江西南昌の西山に遊び、紹鑾禪師について得度した。二十三歳、嵩山で受具し、洛陽で律宗を学んだが、漸宗とさとつて、衣を更え、潭州大鴻山の靈祐（七七一一八五三）に参じ、ついで道吾山の円智（七六九一八三五）に師事した。二夏で大悟し、瀏陽の陶家坊に混俗の弟子が石霜と会い、その様子を聞いた洞山は、石霜を大いに推賞した。それで洞山寂後、多くの者が石霜に流れただといふ。また道吾も最晩年、石霜山に移つたといふ一説もあるほどであるから、道吾下洞山下の者を合し、石霜山は一大叢林となつたのであつた。伝燈錄では洞山が石霜を石霜山に住せしめたといつてゐるが、洞山は石霜山に大善を訪つたこともあつたから、石霜山に何らかの影響力を持つていたのであろう。堂中の老宿は長坐して横臥せず、まるで杭棒のようであつたから、人々は石霜の枯木衆と評した。

石霜がいつごろ石霜山に入ったかは必ずしも明らかでは

ない。祖堂集では、三十五歳、石霜山に止まりて他遊せず、というから、それは八四一年のことになる。しかし宋高僧伝、景德伝燈錄、禪林僧宝伝は、二十年間山を出ず山院に終る、とするから、入寂の八八八年から逆算して、ほぼ八六九年ごろに石霜山に入ったことになる。この間には二十八年の開きがあることになる。この違いは何に起因するであろうか。思うに、祖堂集は孫惺の碑文により、他是南嶽玄泰の行録によるからであろう。ここで一つ考えてみてよいことは、洞山寂後、洞山下の者たちが石霜を捜し求め、囬達したので、また深山に入つたが、参考者たちの熱意におされて石霜山に住することになつたといふことで、八六九年とはまさしく洞山の入寂の年に当たるのである。広化寺の処訥は往徳を追慕し、忘れ去られることを恐れ、南嶽玄泰に命じて、入寂の二箇月後、即ち八八八年四月、言行の纂録を命じてゐる。ここでもう一つ関連して留意すべきは、玄泰が道吾の碑文をいつ撰したかということである。道吾の碑は石霜山にあるから、碑が道吾の寂後間もなく建つたのであるとすれば、石霜の八四一年入山説は妥当なものとなる。しかし玄泰は八八七年寂の巖頭の碑文を撰し、また九〇一年寂の曹山の塔銘も著わしている。

これらのことを考え合せれば、八三年寂の道吾の碑文を早くに撰したとするならば、道吾のものだけ四十数年も前に書かれたということになり、あまりにも一つだけ突出しすぎて不自然である。こんなことから、石霜が洞山の推賞によつて世に出たということは、あながち否定さるべきもなく、洞山と同時期の活動とは認めがたいものがある。従つて道吾の碑も、八六九年入山以後に建つたと考えられるのである。

僖宗（八七三—八八八年在位）は石霜に紫衣を贈つてゐるが、石霜は辞退した。この僖宗の特別な意志は、邵武の龍湖普聞禪師が僖宗の子で、それが石霜の弟子となつていたからといふことに多分に關係していると思われる。また石霜寺は僖宗の時、名を崇勝寺と賜つたといわれる。このことも紫衣と同時のことであつたろう。

石霜の塔銘は平章事の孫偓によつて撰せられた。『新唐書』によれば、孫偓は戸部侍郎をもつて同中書門下平章事となり、それから鳳翔四面行營都統となり、俄かに礼部尚書行營節度諸軍都統招討処置等使となつた。しかし朱朴を通じていたので、道士許巖士に乘じた朱朴は、許巖士が殺されると同時に貶され、連動して孫偓も貶され、衡州司馬

で卒した。『資治通鑑』によれば、八九六年九月鳳翔四面行營都統となり、十月には行營節度、招討、処置等使が加えられた。しかし八九七年二月には道士許巖士が殺され、孫偓は相をやめ、そしてこの年に南州司馬に貶されたとする。通鑑のいう南州とは衡州のことであろう。衡州司馬に貶された後、湖南に来てからの撰文ともみられるが、しかし湖南は乱れており、その頃すでに馬殷が湖南地方の実権を收めつつあって、實際衡州司馬の役につくために都からよく下ることができたかどうか、頗だ疑問である。唐朝は殆ど崩壊に瀕していたのである。とすると、祖堂集の「平章事孫偓撰碑文」という平章事をそのまま認めて、石霜の入寂から八九六年までの間に撰せられたとみる方が事実に近いであろう。

馬祖の弟子総印は潭州の三角寺に住した。湘潭県の東三十里にある。<sup>(70)</sup>寺は三角山の石牛峯下にある。<sup>(71)</sup>総印は後に德山に出て開山となつてゐる。馬祖の弟子に潭州龍山もいる。潭州隱山ともいう。山名でもつて知られる人である。隱山は湘潭県の西南百十里にあり、一名龍山といふ。伝燈録では、洞山が道に迷つて山に入り、そこで龍山に会つたとされる。『湖南通志』では、開元中にある僧が山に入り、

茅庵の老僧と問難久しう、翌日その老僧は庵を焼いて逃げ去り、石壁に詩が残されていたと述べる。また『長沙府志』

では、神山僧密が流れに菜の浮いていいるのを見て、流れに沿つて尋ねると、老僧がいたとし、また石壁に詩が残されていたとする。その詩は殆ど伝燈錄に載せるところと同じである。このように洞山であつたり、神山であつたり、開元中のある僧であつたりして一致しない。しかし覺範德洪の「重修竜王寺記」<sup>(73)</sup>では、洞山が密師伯と一緒に遊方していた時のこととし、伝訛はこれ以後のこととなる。記では光化中（八九八～九〇一）師信という奇比丘がここに庵し雨を祈ると靈験あらたかだったので馬氏も名を避けて雨禪師と言つていたこと、それで山を竜王山とし、その禪林を西禪寺と号したこと、太平興國中（九七六～九八四）竜王寺と名を賜つたことを述べている。

馬祖の弟子智聰は潭州松慈塔に住したというが、目録に名を載せるのみで詳しいことはわからない。馬祖の弟子の永泰靈湍の弟子湖南祇林も湖南に住したが詳しいことはわからない。常に木劍を持って魔を下すといつてた。戒靈はじめ鴻山に参じ、後、永泰に参じて旨にかなつた。そして潭州の上林に住した。長沙の常平倉に上林寺があり、

後唐に建つたという。後唐では時代が合わぬが、恐らくこことを指すものと思う。

南泉の上足である長沙景岑はかつて摩訶衍が住したことのある嶽麓寺に住した。この寺は古くは麓苑寺即ち鹿苑寺と呼ばれ、慧光寺ともいわれた寺で、遠くは晋の法崇を開祖とし、近くは景岑を開山とする。<sup>(74)</sup> 景岑は鹿苑寺第一世と称されている。後には定住することなく、時の人々は長沙和尚と呼んでいた。招賢大師と号する。仰山が大蟲のようだといったことから、世に岑大蟲といわれた。『国訣一切経』の『景德傳燈錄』卷十の脚注で、八六八年示寂をしているが、何によるか不明である。『宋高僧伝』卷十二の雪竇恒通（常通）（八四三～九〇五）は二十歳で具戒し、それから長安の薦福寺で七八年間藏經を尋ね、そして南方に至り、招賢岑大師に遇つたという。このことからすれば八六年か九年に景岑に参じたこととなる。そしてそれから洞山や石霜にも参じたとする。洞山は八六九年寂であるのでそのことを考慮に入れて、伝燈錄の脚注は、雪竇が長沙に参じて間もなく長沙が入寂し、それで洞山、石霜に参じたとみたのであろう。その可能性は充分あるけれども、それだけでは八六八年寂とは確定できないであろう。景岑に

ついでは訛伝が多いようで、太宗の至道三年（九九七）に示寂したといわれたりする。<sup>(75)</sup> 後人は迷つて宋代の人かとしているが、勿論誤りである。長沙について特に注意すべきは『首楞嚴經』を禅思想の骨格としていることで、すでに黄檗の『伝心法要』に首楞嚴經の引用の指摘があり、<sup>(76)</sup> 破仏の少し前に、禅宗においても、南方で首楞嚴經が研究されていたことが明らかとなる。覚範徳洪は「長沙岑大蟲真贊并序」<sup>(77)</sup> で「若心是生、則夢幻空花亦應是生。若身是生、則山河大地森羅万象亦應是生」を引いて、「大哉言乎、与首楞嚴中觀論、相終始也」と述べている。<sup>(78)</sup> 臨濟の弟子三聖慧然が長沙に参じており、それを通してか、臨濟（一八六七）に関心を持っていたようで、無位の真人について偈を作つてゐる。長沙は偈頌に長じていたようで、二十四首残つてゐる。<sup>(79)</sup> また皎月供奉との償債に関する問答もある。馬祖に学んだことのある華嚴智藏は、洪州の報国寺で皎月が涅槃經を講じてゐるのを聞いて出家したから、そのことを考えてみると、長沙が皎月と問答したのは、長沙の若い時、皎月の晩年のことであつたのである。

福建衢州信安に生まれた嘉禾藏廩（七九八—八七九）はこの嶽麓寺で靈智律師について出家した。

更に潭州に秀溪が住した。秀溪が秀水のことならば湘陰県にある川の名である。谷山が問答している。谷山を石霜の法嗣の谷山蔵ではないかと見る人もいるが、馬祖の弟子である秀溪とは時代が合わないのではないかと思う。<sup>(80)</sup> もう一人馬祖の弟子の円暢がいる。目録のみで詳しくはわからぬが、潭州竜牙山に住した。<sup>(81)</sup> 竜牙山は益陽県の西百二十五里にある。<sup>(82)</sup> 竜牙寺は益陽県の西百里にあり、元和中（八〇五—八二〇）僧円洪の開くところにして、初め延祥寺と名づけた。宋の時、竜が白鬚の老と化し、講を聞き、去る時に仏牙を献じたと伝えられ、それで竜牙寺と呼ばれたという。宋とは劉宋をいうのであらうか。『寶刻類編』に太和中（八二七—八三五）「唐竜牙山先大師塔銘」が楊廷によつて撰せられたことを述べる。<sup>(83)</sup> 夾山善会が八一三年ここで出家した。

神山僧密は雲巖を嗣いで潭州神山に住した。しかし潭州に神山という山は見受けられない。神鼎山か神山湖をいうのであらうか。神鼎山は湘陰県東六十里にあり、宋初、首山の弟子鴻禪の住したところである。<sup>(84)</sup> 神山湖は寧鄉県西十五里にある。洞山との問答が多く、『祖堂集』では洞山より先に語を録している。洞山下の人々から師伯と呼ばれ

尊敬されていたから、洞山より年長であつたろう。『五燈会元』で、洞山の言葉の中に師伯と言つてゐる箇所があるが、これは不用意な採録によると言わざるをえない。

【衡州】定心は終南惟政（七五八—八四三）に学び、それから衡州に入った。北宗に属する人である。石頭の弟子道詵も衡州に住したが詳しいことはわからない。『宋高僧伝』の石頭章に、石頭の塔を建てた人として、門人慧朗、振朗らと共に道詵の名があがつてゐるが、この道詵が今の道詵と考えられる。

衡州はやはり南嶽が中心であるが、開拓期の勢いはなく、既に長沙に中心が移つてゐる。

南嶽澄心については潭州のところで既に記したように、はじめ南嶽に住したが、後、太守の請で長沙竜興寺に移つた。澄心と同じ北宗系の日照（七五五—八六二）もいる。陝西閔中岐山県の貴族の家に生まれ、長安の大興善寺の曇光法師について出家、受戒し、かつ仏教学を学んだ。そして嵩山に入り禪を学んだ。伝燈錄では普寂の弟子にしてゐるが年齢からみて不可能であり、普寂の孫弟子に学んだのであろう。後に南嶽の昂頭峯に登つた。昂頭峯の名は『南嶽総勝集』にも『南嶽志』にも見えない。二十年間ここに庵

居し、会昌の沙汰で巖窟に入り、栗を洗い流れに飲んで命を繋いだ。宣宗の復興の後、徒六十人ほどを率いて再び昂頭峯に入った。そして十五年住し、百八歳で入寂した。咸通三年二月三日入塔した。碑があるという。昂頭照といわれた。

元觀（七五二—八三〇）についても伝燈錄では普寂の弟子としているが、やはり時代が合わぬから、その孫弟子に学んだのであろう。長安の生まれである。母の兄が僧で、風貌を見て出家を勧め、それで興善寺に投じた。律、俱舎を学び、それから禪宗を学び、そして南嶽の東台に住した。神人が衆寡に応じて二十年間供施した。神人が私願がかなつたとして別れを告げに來た。元觀の化縁も極まって、徒に囑累して入寂した。太和四年十月二日塔に遷した。七十九歳であった。神照が元觀に学んだ。神照も南嶽に住したと思われる。以上定心、澄心、日照、元觀、神照と北宗系の人が都合五人、南嶽一帯に住したわけで、一つの勢力を形成していたと言つてよい。

西園曇藏（七五八—八二七）ははじめ馬祖に参じ、次で石頭に参じた。馬祖の弟子とされている。七八六年衡嶽の峯の頂上に棲止した。衡嶽には七十二峯があり中でも祝融峯

が最も高い。祝融廟があり、また旧くは光天觀があつて、十二光天壇福地とされていた。光天觀は隋代に寺に代つて上封寺となつた。祝融峯には蛟松があり、或は変じて大蟒となり、人を魅するが害はなさなかつた、といわれる。曇藏は賢い犬を飼っていた。ある晩犬がひどく吠えた。翌朝外に出てみると大蟒蛇が小舎を取り巻いていた。侍者が逃げるように言うが、曇藏は法性空なりと言つて、出て蟒蛇の首をなでると、ゆっくりと去つて行き、ぱつと見えなくなつてしまつた。これらの話をつき合せてみて、曇藏の最初棲止したところは祝融峯であつたとみられるのである。晩年脚を病んで、西園蘭若に移つた。西園蘭若がわからぬが、太和元年嶽中に終る、とされるから、嶽中乃至その辺にあつたと予想せられる。

鄧隱峯は俗姓が鄧氏で、五台山の峯にいたのでそう呼ばれる。福建建州邵武の生まれである。少時、慾狂にて、父の命にも従わなかつた。馬祖に参じたが会せず、石頭にも参じたが契わらず、また馬祖のもとに戻つた。南泉に参じて侍者となり、南泉の印許を得た。鴻山にも立ち寄つてゐる。馬祖の禪を嗣いだといつて、冬は衡嶽におり、夏は清涼に止まる、という。举措は甚だ粗暴のようであるが、常識では測れぬ人である。純粹で思慮分別を介さなかつたところに祖師として列せられる所以があろう。例えば鴻山は師叔が上山したということで、威儀を正して僧堂に向うと、隱峯は首座の单に衣鉢を置いていたが、来るのを見つて睡つたふりをした。鴻山は方丈に帰つた。隱峯はすぐ山を下つた。鴻山が侍者に隱峯の様子を尋ねると、既に去つたという。どんな言葉があつたか聞くと、何もなかつたと答えた。鴻山は「言うな、言葉がなかつたとは」と激怒したという。凡僧とは決して見ていなかつたのである。馬祖の弟子智周も南嶽にいたが、目録のみで、それ以上のこととはわからない。

大慈寰中（七八〇—八六二）は山西河東蒲坂の人で、年二十五歳、甲科に合格したが、母の死に会い、山西太原の童子寺に往つて出家した。二年間で諸經に目を通してしまつた。三年の後、嵩山に受戒し、律部を習つたが満足せず、江西の百丈懷海に学んで玄旨を得た。江西の撫州に住し、後、南嶽の常樂寺に隠れ、山舎に茅舎を作つて住した。諫議崔公、即ち崔群が德に感じて別に方丈を建てた。後に浙江の大慈山に住した。常樂寺に南泉が尋ねている。東寺如会のところに述べたように、崔群が湖南にいたのは、八一

九年末から八二〇年の前半までであったから、方丈を建てたのも、八二〇年のことであったのである。一丈を説得せんよりも一尺を行取せんには如かず、一尺を説得せんよりも一寸を行取せんには如かず、と言つて、説得よりも行取を重んじた。洞山は着語して、行不得底を説取し、説不得底を行取せん、と述べる。明らかに宗風の違いがあるが、洞山の奥深さは測り知れない。樂浦は行説俱に到れば本事は無、行説俱に到らざれば本事は在、と著語し、大慈和尚は古仏、洞山和尚は細懶、と言つて、却つて洞山を批判している。

仏光如満は馬祖の弟子である。先に五台山の金閣寺に住したが、後に洛陽に住した。唐の順宗（八〇五年在位）との問答、白居易が参じて金剛宝戒を稟けたことで名の知られる人である。貞元初（七八五）仏光大師と賜い、洛陽から衡州に来て、貞元間（七八五～八〇五）祝融峯の後に横竜寺を建てた<sup>(86)</sup>、といわれる。ところで仏光大師が賜号であるかどうか。伝燈錄では「洛京仏光如満」とするが、実は長安の宮中に仏光寺があるのである。<sup>(87)</sup>それは神竜殿の西にあり、それ故神竜寺ともいわれたようである。宋の廖侁の「横竜寺記」は賜号としているが、記が書かれたのは熙寧九年（一〇

七六、乙卯と干支を併記するので、干支によれば一〇七五）であるから、証拠とはなりにくく、洛陽ではなくて長安だったとすれば、寺号に他ならない。また貞元初め横竜寺を建てたのならば、順宗ではなくて、徳宗（七七九～八〇四年在位）との問答でなければならない。かつ順宗は病がちで、一月より八月まで位にあつて、それで薨じ、洛陽には行幸していないから、如満が洛京にいたとする事、順宗との問答とすること、のどちらかに誤りがあることになる。当時存命中の賜号はめったにないことで、仮にあつたとすれば名声類いないことであるから、南陽慧忠、徑山法欽のように行歴もはつきりしているはずである。しからば一時宮中の仏光寺に止住したとみるのがよく、そしてその後、南嶽の横竜寺に住し、晩年洛陽に出ていすれかの寺に住し、その時白居易が参じたとすれば、「洛京仏光如満」の解釈は立つ。白居易は敬宗宝曆二年（八二六）病をもつて官を免ぜられ、洛陽に帰り、しかも八二七年三月には秘書監となつて長安に住し、八二九年春、官を罷めて洛陽に住したから、参じた時期はごく狭まつてくるのである。

【岳艸】（巴州、もと巴陵郡）ここは岳陽楼などの有名な史蹟があるにもかかわらず、何故か禪宗がほとんど入つて

い。長沙と荊州との中間で、両方に引かれて空白地帯をなすのであらう。それに五代時代などは、呉（南唐）と南平と境を接して前戦基地となることや、山が少ないとこと、夏は酷暑となることなどによるのであらう。東寺如会の弟子に、目録のみであるが、潭州幕輔昭がいる。幕輔が幕阜山のことならば、岳州平江県（当時は昌江县）に属する。幕阜山を幕輔山と記す例はまだ見出していないし、阜と輔は音が違うから誤まりかもしれないが、潭州に幕輔山という山を見出せないので、一応幕阜山のこととして取扱つておく。

**【常徳府】**（朗州）朗州もまだこの期にはあまり入つておらず、僅か五人を数えるのみである。

馬祖の弟子の総印ははじめ潭州三角山に住し、ついで朗州武陵県東南十五里にある善徳山<sup>(89)</sup>に住して第一世となつた。善徳山は一名枉山といい、禪宗の場合<sup>(90)</sup>は徳山といつてある。宣鑑が出て、第二世として住してから有名となる。学人が三角に三宝を問うと、禾麦豆だという。大衆が欣然と奉持するではないか、というのである。洪恩も同じく馬祖を嗣いで朗州中邑に住した。仰山が参じていて、後世法眼下では仰山との問答を拈提し、仰山によつて中邑が名を

得たという。徳山宣鑑については脱漏したので他の機会に譲る。

懷政は章敬を嗣いで朗州東邑に住した。仰山が参じてい来る。もう一人章敬の弟子の古提和尚も朗州に住した。僧が来れば常に、去れ、汝に仏性なし、と言つていた。この方便は招提慧朗も常に用いていたところのことである。ここにも仰山が参じていて、仰山が参じていて、

**【郴艸】**（もと桂陽郡）ここはほとんど禪宗が入つていな。辺鄙なためであろう。ここは茗溪道行の本貫であった。

**○**は宋高僧伝でいう澧州茗溪に住した道行（七五二—八二〇）は伝燈錄の澧州茗溪に住した道行（七五二—八二〇）は宋高僧伝でいう澧州開元寺道行のことである。郴州の生まれで、十二歳仏道に入り、南嶽の般若道場で教理を学んだ。次いで江西鍾陵の開元寺で馬祖に訣を求める、法を証して自在三昧と号した。そして澧陽の西南に入り、木を伐つて室を作り方丈とした。ここが茗溪山と思われる。そこに寺があり、茗溪寺という。茗溪寺は王家廠の南にある。<sup>(91)</sup>王家廠は澧県城から西北に六十里離れたところにある。ついで太守の招請で州治の開元寺に住し、間もなく元和十五年、六十九歳で入寂し、塔を建てた。茗溪は蘿山を訪問したこともあった。

馬祖を嗣いだ廣澄は大同山に住した。大同山は澧州府の

東二十五里にあるが、古大同が閔山にあるといい、閔山は東十五里にある<sup>(92)</sup>というから、古大同寺が廣澄の住したところである。

藥山惟儼（七四四一八二七）は石頭を嗣いだ。藥山の行歴については『祖堂集』『宋高僧伝』『景德伝燈錄』『澧州藥山故惟儼大師碑銘并序』<sup>(93)</sup>に依るのであるが、しかしその間に二、三重要な点で違いがある。そこで相互に対照してみよう。

諱 唯儼（宋）、惟儼（碑、祖、景）。  
姓 寒（宋）、韓（祖、景）。

本貫又は生地 絳県（宋）、絳州（祖、景。祖は後に南康に徙る<sup>(94)</sup>とす）、南康信豐県（碑）。

修学地 湖陽西山（宋）、潮州（潮陽）西山（祖、景。景は出家とす）、潮之西山（碑、出家とす）。

修学の師 慧（惠）照禪師（碑、祖、宋、景）。

就学年齢 十七歳（碑、祖、宋、景）。

受戒、戒師、年 衡嶽（寺）希深（琛）律師、大曆八年（碑、

祖、宋、景）。

禪學 石頭・嵩嶽洪、馬祖に二十年（碑）、石頭（祖、

宋、景）。

遊地 羅浮、清涼、三峽、九江（碑）。

住地 藥山（碑、宋、景）、芍藥山（祖）。

入山年 貞元初（碑、祖）。

寂年、寿、臘 太和二年・七十歳（宋）、太和八年甲寅  
歳十一月六日、八十四歳・六十五年（祖）、同年二月、  
八十四歳・六十年（景）、十二月六日、八十四歳・六  
十年（碑）。

建塔者 弟子冲虛等（碑、景。碑は寂後二十日に建てた  
とす）。

碑銘 寂後八歲（碑）。

右より特に注意すべきは禪學の師と入寂の年である。そこで逐次検討してみよう。諱の惟儼と惟儼は同音によるための違いで、名の意味するところからは惟の方がよい。俗姓の寒と韓も同音による誤用で、寒という姓もあるにはあるが、韓が一般的である。韓姓は北方に多い。杭州、廣東あたりにも見られるが、時代が下っており、東晉、南北朝あたりで移住したためであろう。しかば俗姓は韓、本貫は絳州、南康は生地もしくは幼年期に移住したところであろう。就学地の湖陽は潮陽の誤りとみるのが無難である

が、江西洪州の西山という考え方も捨てきれないところがある。修学の師慧照禪師とそれが十七歳の時であったといふことは一致する。碑銘と伝燈錄は出家であったとしている。陳詡の「唐洪州百丈山故懷海禪師塔銘」によれば、百丈も西山の慧照和尚について出家したのであった。ついで大曆八年（七七三）衡嶽（寺）の希深律師について受戒したが、これも一致する。

ところが参禅の師については大いに注意を要する。祖堂集、宋高僧伝、景德伝燈錄には皆馬祖に参じたことは書かれておらず、石頭に参じたとするのであるが、唐仲の碑銘のみ馬祖に二十年参じたとするのである。即ち碑銘に、

大曆八年、受具於衡嶽希深律師。祝礼矩儀、動如宿習。

二朝乃言曰、「大丈夫、當離法自靜（リ淨）、焉能屑屑事、山細行於衣巾耶」。是時、南嶽有遷、江西有寂、中嶽有洪、皆悟心契。乃知大圭之質。豈俟磨礱照乘之珍、難晦符彩。自是、寂以大乘法、聞四方學徒。至於指心伝要、衆所不<sup>ハ</sup>能達者。師必默識、懸解不違。如愚居寂之室、垂二十年。文面からすれば藥山は南嶽希遷、江西馬祖、嵩嶽洪に参じ、皆心に契つたことから、大圭の質なることが知られ、馬祖の心要を伝えるということに至つては、達するものが殆ど

居らなかつたのに、藥山は黙識し、愚の如く二十年間馬祖に侍した、というのである。この文からは馬祖に参じたことが強く印象づけられるのである。次いで、

寂曰、「爾之所得、可謂、浹於心術。布於四體。欲益而無所益、欲知而無所知。渾然天和合於大無。吾無有以教矣。仏法以開示群盲、為大功。度滅衆惡、為大德。爾當以功德、普濟迷途、宜作梯航。無久滯此」。

といわれて羅浮、清涼、三峡、九江に遊び、貞元初（七八五）、藥山に入つたのであった。従つて碑銘に従えれば、大略七六年から七八五年近くまで馬祖に侍していたこととなつて、それは龔公山から開元寺に従つていたことになる。

藥山は澧州の南九十里にあり、昔芍藥が多かつたので名づけられた。山頂に長嘯峯があり、惟儼が、夜、嘯いたところである。そこに藥山寺がある。後に元祐二年（八八六）雷満が奏して寺額を賜わり、「慈雲禪寺碑」の断碑が今も存する。また「藥山牛欄八字古碑」がある。

寂年月日は四者四様であるが、宋高僧伝の太和二年（八二八）説と、祖堂集伝燈錄の太和八年説と、年号をいわない碑銘とに別けられる。祖堂集が十一月六日、碑銘が十二

月六日である違ひについては、祖堂集の一は二の誤まり、もしくは二の文字が欠けての一の字になつた（現在の祖堂集は欠けたとは思われない）とみれば問題は解消し、伝燈錄は十が欠落したとみれば一応の説明はつく。年齢は宋高僧伝の七十歳に対し、他は八十四歳で一致する。年齢は宋高僧伝が六十五年、碑銘と伝燈錄が六十年で同じで、これは祖堂集が六十五年、碑銘と伝燈錄が六十年で同じである。しかし大曆八年の受戒であつたから、正しくは六年でなければならないことになる。

ところで薬山の入寂は太和八年ではなかつた。それは碑銘をしつかり読めば明らかのことである。碑銘の文頭に、上嗣位、明年、澧陽郡薬山釈氏大師、以十二月六日、終於修心之所。後八歳、門人持先師之行、西來京師、告於崇敬寺大德、求所以發揮先師之耿光垂於不朽。  
といふ。上とは文宗を指すであろう。敬宗は宝曆二年（八二六）十一月に崩じ、十二月文宗が即位した。上嗣位の明年は宝曆三年即ち二月改元して太和元年（八二七）の年なのである。宋高僧伝が太和二年とするのは、文宗の最初の年である。崇敬寺大徳は唐仲の従母兄で、徑山に嗣法した人である。興善惟寬（七五五—八一七）が入寂してからは、崇敬に皆参じたとし、崇敬は自分の道は薬山によつて明らかにされたとして尊崇しており、その関係で唐仲が碑銘を撰することになったのである。唐仲は儒学に造詣が深かつた人で、宝曆元年（八二五）賢良方正直言極諫科第三等に挙げられた人であるが、詳しいことはわからない。崇敬寺大徳も

祖堂集、伝燈錄の太和八年説は碑銘の撰せられた年を入寂の年と誤ったがためであろう。その誘因は寂後二十日で冲虛等が塔を建てたということにあるのであろう。普通、塔を建てると同時に塔銘が作られるからである。以上碑銘の考察から入寂年は三本共に誤っていることになるのである。そして法臘も五十五年でなければならない。

さて次に嗣法の師であるが、宋高僧伝、祖堂集、伝燈錄、共に石頭として何ら疑いない。しかも、これらは、寂年の考察から、誤っていたとはいえ、全て唐仲の碑文を直接もしくは間接的に知つていたのである。しかば薬山は石頭、馬祖、中嶽洪の三師に学び、馬祖に二十年参じたといえ、最初の師石頭を嗣いだことには疑いを持つていなかつたことになる。薬山の門人が崇敬寺大徳に碑銘を依頼するが、崇敬寺大徳は唐仲の従母兄で、徑山に嗣法した人である。興善惟寬（七五五—八一七）が入寂してからは、崇敬に皆参じたとし、崇敬は自分の道は薬山によつて明らかにされたとして尊崇しており、その関係で唐仲が碑銘を撰することになったのである。唐仲は儒学に造詣が深かつた人で、宝曆元年（八二五）賢良方正直言極諫科第三等に挙げられた人であるが、詳しいことはわからない。崇敬寺大徳も

必ずしも薬山について熟知していたとは思われない。依頼の門人がどの程度薬山の行歴を正しく伝えたか。馬祖に二十年も参じたとすれば、馬祖との問答等も残されてしかるべきであるのに、馬祖との関係を示すものは何もない。二十年というのはどうにも解せないのである。

薬山と李翹の問答は有名である。宋高僧伝は形式の上から問答はあまり載せないのであるが、めずらしく薬山章では載せてある。李翹の儒学は「『中庸』を中心として、之に対する解釈に、道仏二教を以てし、後の新儒教への第一歩」となった。仏教の浮華に厳しかった李翹が薬山を尊崇していることが、薬山の禪風を闡明にさせるからであろう。

史となつた。景儉は元稹、李紳と誼を通じていた。当時の二人が翰林にあつて穆宗にとりなしたので、穆宗は憐んで追詔した。それで倉部員外郎を拝し、月余に俄かに諫議大夫に遷つた。李翹も連動して、入つて礼部郎中となつた。太和初（八一七）諫議大夫となり、三年二月中書舍人を拝した。五年桂州刺史御史中丞として桂管都防禦使に充てられ、七年（八三三）改めて潭州刺史湖南觀察使に充てられた。八年刑部侍郎となり、九年戸部侍郎に転じ、七月檢校戸部尚書襄州刺史山南東道節度使となつた。会昌中（八四一～八四六）卒した。

概に指摘されているように、李翹は薬山の外、西堂、鷺湖及び紫玉との交渉があつたとされる。まず伝燈錄西堂章には、貞元七年（七九二）西堂が開堂した時に問うたことが記されている。登第以前のこととなる。伝燈錄の鷺湖章にも鷺湖に問うたことが記されている。鷺湖の入内していいた時とみるのが妥当で、徳宗末、順宗の時（八〇五年以前）であつたろう。登第後、史館修撰になる以前のことである。李翹は紫玉禪翁にも参じていたとされる。宋高僧伝では襄州刺史山南東道節度の時のことと記すが、紫玉禪翁が道通をいうならば、道通は七三一十八二三年の人であるから、澧州に貶黜されたのであつた。李翹も坐して、出て朗州刺

入寂になってしまった道理に合わない。道通は八一三年、唐州紫玉山を弟子の金藏に譲って襄州に行き、その年の七月十五日に入寂している。李翹が湖北襄州で会ったとすれば八一三年のみであり、それ以前であるならば、馬祖の入寂（七八八）により洪州開元寺を去つて遊方している頃か、河南唐州紫玉山に住していた時という、甚だ漠然とした時期になる。また李翹が薬山に参じたのは朗州刺史であった八二〇年のことである。時に薬山七十七歳であった。

以上四人との交渉が全て事実であつたかどうか、特に西堂と紫玉については、現状の資料からはあつたともなかつたとも言ひ切れない。李翹は翰愈の弟子で柳宗元と共に古文復興の旗頭であったが、宋高僧伝では、李翹が『復性書』を著わし、翰愈、柳宗元が、仏教の考え方がこの書の奥に潜んでいるのを見て取つて、「我が道儒萎遲す、翹且く逃ぐ」と評したと言つてゐるから、仏教を深く研究し、己の儒学の糧としようとしていたのである。それで、折に触れて積極的に僧に接触しようとした態度はあつたはずである。しかし既に東寺のところで述べたように、李翹が湖南觀察使の時（八三三）、長沙中心に墳塔を破壊するという挙に出ている。浮華に堕し似而非佛教の横行する中で、とか

く性急で激しい性格の李翹は、己の学的態度を蛮勇でもつて示したといえる。その態度は必ずしも排仏一边倒ではなく、却つて佛教の本来的姿を己の学問に照らしていたものと思われる。けれどもこの警醒は一隅の事件として埋没してしまい、安逸を貪つて、ついに会昌の破仏を惹起せしめることとなつたのである。

李翹の外に相国崔群、常侍温造も薬山に参じてゐる。当時湖南觀察使であった崔群は大慈寢中にも参じていたが、それは八二〇年前半のことであつた。

温造(105)（七六六一八三五）は字は簡輿、河内の人である。科挙の試を喜こばず、節を持してゐた。寿州刺史張封の招請で寿州に行つた。李希烈の侵寇に対し、范陽の劉濟を朝廷の味方につけるべき詔を奉じて、節度參謀として幽州に往き、大任を果たして、名が朝廷に聞こえた。長慶元年（八二一）京兆府司錄參軍を授かり、殿中侍御史に遷つた。幽州の劉総が朝廷に伏する時の使者として、起居舍人、太原鎮州幽州宣諭使に充てられて活躍したが、一緒に飲んでいたため、李景儉が酔つて丞相に謁したことの件に坐して朗州刺史となつた。田二千頃を灌漑して大いに善政を施し、居ること四年、召されて侍御史に任ぜられた。ついで左司

郎中に遷り、御史中丞を挙げ、太和二年（八二八）尚書右丞に遷り、檢校礼部尚書を加えられた。五年四月兵部侍郎になり、七月檢校戸部尚書東都留守等となり、九月河陽懷節度觀察等使となつた。七年入つて御史大夫となり、九年礼部尚書に転じ、六月病で卒した。七十歳であつた。温造が薬山に参じたのは朗州刺史となつた時のことである。この一件には李翹もからんでおり、李翹も朗州刺史になつたから、同時に二人の朗州刺史ができたこととなつてしまふ。温造が朗州刺史となるのは李翹の後任とみるとべきである。即ち幽州宣諭使の務を果たした後のことであつたから、連坐といふのは適當でなかろう。即ち長慶中（八二一～八二四）の頃の期間朗州刺史であつたとみられる。

薬山惟儼はもともと萍蓬のような浮生であるから、今さら飄転すべくもなしとして、薬山に入り庵を作つて扶坐していた。鄉人が飲食を持って来ても、徳もなく、どうして人を労させられようか、と言つて受けなかつた。鄉人が強いて一日の費用をたずねると、米一升（日本の六合弱）で足りると言つたので、山菜を数本添えて布施していた。薬山は毎日法華、華嚴、涅槃經を看読し、三十年間一日のごときであった。数年後学徒が増したので、禪室を葺き、學

徒の多くなるに従つて鱗のように棟を接していく。大練布で衣を作り、竹で靴をつくり、自ら剃髪し、自ら食事を作り、百数十人の門人童行がいても、終始同じように自らつとめ、どんな珍羞があつても食事を変えることなく、夏は夏衣、冬は冬衣と十年一日のごとく、どんなに立派な室ができ調度が整つても、はじめの処を用い、野獸が繞つても態度を変えず、貴人が來ても賤人が來ても礼儀を変えなかつた。禪室は最初牛小屋を用いたといわれるよう、頗る質素な生活で、その生活態度を最後まで変えなかつたのであつた。体は鶴のようであつた。李翹もそのような薬山に大いに尊敬の念を持つた。臨終に及んで「法堂倒る」といつた。門人達は柱を抱え、支柱を施すと、皆意を曉つていない、と大笑した。そして合掌して往つた。弘道大師と謚し、塔を化城という。この謚号は唐仲の塔銘が書かれた時ではなく、もう少し後のことである。

薬山では船子德誠、道吾円智、雲巖疊威、高沙弥、薬山夔等が学んだ。高沙弥は江陵に受戒に行こうとしたところ、薬山惟儼に、一人有つて、受戒しなくとも生死を免がるる、といわれ、またこの跛脚の沙弥は僧務に任えず、といわれ、薬山の後庵に住すこととなつた。高は俗姓であ

ろう。それで高沙弥と呼ばれ、また石室高沙弥とも呼ばれる。夔は薬山に住した。

龍潭崇信は湖北江陵渚宮の人で、胡餅を作る家の子であった。毎日天皇道悟のところに餅籠を下げて行き、供養していた。その因縁で天皇に学び、後に澧州の龍潭寺に住した。龍潭寺は州城の北門外にあり、咸通中（八六〇）<sup>106</sup>～八七三）<sup>107</sup>崇信が建てたといわれる。後に報恩寺と呼ばれた。<sup>108</sup>龍潭は龍寺曉鐘として城外八景の一に数えられる。龍潭は李翹が朗州刺史であつた八二〇年のことであつたと思われる。龍潭の生寂年はわからぬが、師の天皇（七四八～八〇七）の寂年及び弟子徳山（七八二～八六五）の寂年から考へて、湖南觀察使の時（八三三年）では遅すぎると判断するからである。晩年龍潭寺が叢林をなしたのであらうから、咸通以前に寺が建つてゐるはずである。徳山が出て一門は栄えた。

夾山善会（八〇五～八八一）もいる。夾山は広州峴亭の人である。祖堂集では漢廣といふが、五代には廣東が南漢の境域となるので、五代時代の編集にかかる祖堂集は、そこで漢廣といふのである。潭州の龍牙山で出家した。龍牙

円暢が住んでいた頃に当たる。湖北荆門で受戒した。そして荊州で仏教学を学んで、それから江蘇の京口に住した。

この時道吾がやつて來た。そして道吾に「一等に出世するも未だ師あらず」と言われて、衣を更えて禪門に入り、道吾の紹介で華亭県の船子徳誠に参じた。かつて道吾、雲巖、華亭は、師薬山の入寂により、別れてそれぞれの道に進まんとする時、華亭が、靈利の者があつたら、自分のところによこしてほしいと道吾に依頼していたので、人物を見込んで紹介したのであつた。華亭県の吳江で船上の生活をしていたので船子和尚と呼ばれていた。問答應酬、「一句合頭の語、万劫の繫驢橛。垂絲千尺、意は深潭に在り、鉤を離ること三寸。速やかに道え」と言われ、口を開こうとする間もなく、竿で水中に突き飛ばされた。そこで大悟した。華亭は船で去つたまま、その後杳として知れない。夾山は頻りに世を避けたが、それでも学人が交渉した。そこで咸通十一年（八七〇）、澧州西四十里の夾山に院宇を築いた。清の許涓の「夾山記」には、「猿は子を抱いて青嶂嶺に帰り、鳥は花を銜ばんで碧巖泉に落とす」という有名な語を記している碑が存在していたことを伝えている。<sup>109</sup>周知のことく『碧巖集』はこの語に由来する。青嶂嶺の南に碧

湖南の禅宗の推移（上）（鈴木）

巖泉がある。五代の周様に「天門靈泉院」の詩<sup>(10)</sup>があるから、それが寺名であったと知られる。中和元年十一月七日入寂、寿齢七十七、法臘五十七であった。勅して伝明大師と謚し、塔を永濟と賜った。韶州刺史金彙が碑銘を記した。夾山の応答は全く詩的で、宋代の文学的な表現の先駆をなすものである。謚号と塔名は東寺と同じで、混乱がみられる。

- 注 祖堂集、宋高僧伝、景德伝燈については、必要以外、煩瑣を避けて注記を省く。  
 (1) 拙稿「湖南の禅宗に関する資料——唐・五代——」（愛知学院大学文学部紀要）第一〇号、昭和五六年三月  
 (2) 拙稿「江西の禅宗に関する資料——唐・五代——」（愛知学院大学文学部紀要）第八号、昭和五四年三月）  
 (3) 拙稿「湖南の禅宗に関する資料——唐・五代——」（愛知学院大学文学部紀要）第一〇号、昭和五六年三月）  
 (4) 陳田夫『南嶽總勝集』三卷（大正新修大藏經卷五一所収）。  
 (5) 清、曾国荃撰、光緒二年重刊本『湖南通志』卷一五（以下、通志と省略）。  
 (6) 同上。  
 (7) 同卷一四。  
 (8) 清、呂肅高修、張雄図纂、乾隆二年刊本『長沙府志』卷五。  
 (9) 『全唐文』卷二六三、李邕「嶽麓寺碑」。  
 (10) 椎名宏雄『宝林伝』卷九卷十の逸文』（『宗学研究』卷二二、昭和五五年三月）。

(11) 帰登の碑文は今はわからない。帰登（七五四～八二〇）は帰崇敬の子で、字は冲之。大曆七年（七七二）科挙に登第し、四門助教を補し、貞元初（七八五）また賢良科に登った。そして右拾遺を拝した。右補闕起居舍人に転じ、三任十五年間同じであった。後兵部員外郎に遷り、史館修撰を加えられた。順宗の初（八〇五）給事中を拝し、工部侍郎に遷った。勅を受けて、孟簡、劉伯芻、蕭俛と『大乘本生心地觀經』を翻訳した。改めて左散騎常侍となつた。そして兵部侍郎から工部尚書に遷り、元和十五年卒した。文章にすぐれ、草書隸書にたくみであった。『旧唐書』卷一四九付帰崇敬伝、『新唐書』卷一六四同。『宋高僧伝』では、常侍帰登が碑文を撰したことというから、常侍の時で

ある。順宗が皇太子の時侍讀であつて、その恩に對して給事中になったのであるから、憲宗の元和になつてから左散騎常侍になつたのである。

(12) 『全唐文』卷六一九。

(13) 元、至正元年(一三四一)、梅屋念常撰『仏祖歴代通載』

卷一三、大正藏四九、五九五c～五九六a。

(14) 『全唐文』卷六一九に記す略歴による。『旧唐書』卷一六

二参照。

(15) 拙稿「江西の禅宗の推移(上)」で既に述べたことであるが、憲宗の時入内したとするのは誤りで、徳宗の召命で入内したのである。

(16) 金州は今の陝西安康県で、安康は今の陝西漢陰県になる。安康は隋代の県名で、唐代のものではない。今の安康と漢陰では六〇キロメートルぐらい離れている。碑文で本貫が安康とするのは、隋又は唐初、南嶽の祖が長安に出たから、隋代の古い地名で言つたのであろう。碑文に一日の長がある。脱稿後、柳田聖山氏の「新続灯史の系譜」(『禅学研究』60)が出た。多岐に亘って述べられているが、南嶽についても参照されたい。

(17) 古田紹欽、田中良昭共著『慧能』(大蔵出版、昭和五七年一月)一八四頁以下に、具体的人名の増加の変化が記されている。

(18) 常盤大定『支那佛教史蹟踏査記』三七七頁の取意。

(19) 同上、三七八頁取意。

(20) 『南嶽總勝集』卷中、大正藏五一、一〇七一a。

(21) 『全唐文』卷七二一。太白觀宗については、関口真大『禪宗思想史』二八四～二八六頁参照。

(22) 『旧唐書』卷一三〇、『新唐書』卷一三九。

(23) 大正藏五一、一〇五九a。

(24) 同上一〇七一a。

(25) 『禪宗史研究』三〇六頁。

(26) 『全唐文』卷五八七、柳宗元「南嶽弥陀和尚碑并序」。

(27) 古田紹欽「羅浮山の仏教」(『仏教研究』第三卷第六号)。

(28) 大正藏五一、一〇七八c。

(29) 裴休は生卒年が不明であるが、大中十年(八五六)六月、靈武節度使となつてゐるから、大中末年までは生存した。

(30) 五三頁。

(31) 三七六頁。

(32) 『全唐文』卷五八七の柳宗元「曹溪第六祖賜謚大鑑禪師碑并序」を指す。

(33) 『仏祖統紀』卷四一、大正藏卷四九、三八一c。

(34) 藏勵鯀『中國人名大辭典』等による。

(35) 別に「廬山黃石巖院記」があり、『全唐文』卷七四二に載せるところであるが、宋、本覚『釈氏通鑑』卷一〇によ

湖南の禅宗の推移（上）（鈴木）

- れば、貞元一六年（八〇〇）劉軻が廬山に遊んだ時の撰述とする。
- (36) 清、嘉慶一五年刊二二年増補本『長沙縣志』卷二四。そこに陶汝の「鼎建万福禪林碑記」が載せられ、「万福寺は郡の西、憲府の左にあり。或は古の竜興寺の旧址なりと謂う」と述べている。
- (37) 『長沙府志』卷三五。
- (38) 『禪宗史研究』三三二頁。ただし十九歳出家というのは単純な誤りで、二十九歳が正しい。従つて二十歳受具として見立てるのも誤りである。
- (39) 嶽寺が潭州嶽麓山の嶽麓寺をいうのか、或は衡山の衡嶽寺（南嶽寺）をいうのか、南嶽中の寺をいうのか明らかでない。藥山も受戒した南嶽寺とみるのがよいかも知れない。しかし南嶽の般若寺で受戒した人もいる。
- (40) 前掲書『慧能』二二一～二二五頁。
- (41) 拙稿前掲「即心是仏より非心非仏へ」を参照されたい。
- (42) 余靖『武溪集』卷九。
- (43) 宇井伯寿『禪宗史研究』二九〇頁で、玉山惠福であろうとされる。
- (44) 『通志』卷一三。
- (45) 『通志』卷二三八、『長沙府志』卷三五。
- (46) 『通志』卷一五。
- (47) 『通志』卷二三八。
- (48) 『長沙府志』卷五。
- (49) 『通志』卷一三。
- (50) 『祖堂集』は崔胤とする。崔胤は八五四十九〇四年の人で、國を乱したということで朱全忠に殺された。『旧唐書』卷一七七付崔慎由伝、『新唐書』卷二二三下姦臣に伝記が載っている。時代が合わず、全く別人である。
- (51) 崔群の伝は『旧唐書』卷一五九、『新唐書』卷一六五。
- (52) 『福建通志』卷二六五。
- (53) 『全唐文』卷八二〇。
- (54) 『旧唐書』卷一七七、『新唐書』卷一八二。
- (55) 『旧唐書』卷一八七下忠義下付李愬伝、『新唐書』卷一七七。
- (56) 『旧唐書』卷一七七、『新唐書』卷一四四付崔融伝。
- (57) 『旧唐書』卷一六三付盧簡辞伝、『新唐書』卷一七七付盧簡辭伝。
- (58) 『旧唐書』卷一九〇下文苑、『新唐書』卷一〇三文芸。
- (59) 『中國詩人選集15』の高橋和巳注『李商隱』（岩波書店、昭和三三年八月）の巻末「李商隱年譜」に負う。
- 想に就いて」（『印度学仏教学研究』第一五卷第一号、昭和四一年一二月）の論文がある。

- (60) 『通志』卷一七。
- (61) 『長沙府志』卷五。
- (62) 拙稿「会昌の破仏と禅宗」(『印度学仏教学研究』第三〇卷第二号、昭和五七年三月)。
- (63) 『長沙府志』卷五、『通志』卷一三。
- (64) 『通志』卷二三八。
- (65) 『通志』卷一三。
- (66) 惠洪『禪林僧宝伝』卷五「邵武竜湖聞禪師」参照。
- (67) 『通志』卷二三八。
- (68) 『新唐書』卷一八三朱朴伝。
- (69) 『資治通鑑』卷二六〇。
- (70) 『通志』卷二三八。
- (71) 清、陳嘉榆等修、王闡運等纂、光緒一五年刊本『湘潭縣志』卷四。
- (72) 『通志』卷一四。
- (73) 覚範徳洪(惠洪)『石門文字禪』卷二一。
- (74) 常盤大定『支那佛教史蹟評解』四。
- (75) 例えば『長沙府志』卷三五方外、『長沙県志』卷二五。県志は『大清一統志』より引用している。
- (76) 『禪の語録8』の入矢義高『伝心法要・宛陵錄』(筑摩書房、昭和四四年一二月)。
- (77) 『石門文字禪』卷一八。
- (78) 拙稿「偈頌の成立過程」(曹洞宗研究員研究生『研究紀要』第五号、昭和四八年九月)。
- (79) 『景德伝燈錄』卷三、慧可章割注。
- (80) 『長沙府志』卷五。
- (81) 『通志』卷二三八。
- (82) 『宝刻類編』卷五、『通志』卷二六一。
- (83) 『通志』卷一三。
- (84) 『通志』卷一四。
- (85) 『南嶽總勝集』卷上及び中、大正藏五一、一〇五七a-c及び一〇七一b。「上封寺」の条に、古の「先天觀」とするのは「光天觀」の誤り。
- (86) 宋、廖侁「橫龍寺記」(『通志』卷二三九に掲載)。拙稿前掲「湖南の禅宗に関する資料」三二頁を参照されたい。
- (87) 『唐兩京城坊攷』卷一。神竜寺については、小野勝年『入唐求法巡礼行紀の研究』第四卷一九頁にも記す。
- (88) 『旧唐書』卷一六六、『新唐書』卷一九九。『中国詩人選集13』の高木正一注『白居易』下巻卷末の「白居易年譜」(岩波書店、昭和三三年一〇月)を参照する。
- (89) 『通志』卷二三。
- (90) 張之覚修、孟慶暄等纂、民国二八年刊本『澧県県志』卷三。
- (91) 同上及び同志地図。
- (92) 『通志』卷二七。

湖南の禅宗の推移（上）（鈴木）

『澧県県志』卷三。

『通志』卷二七。『澧県県志』の地図。

93 『澧県県志』卷三。  
94 『通志』卷二七。『澧県県志』の地図。  
95 『全唐文』卷五三六、唐仲「澧州藥山故惟儼大師碑銘并序」  
96 『全唐文』卷四四六。

97 『通志』卷二七及び『太平寰宇記補闕』。

98 『輿地紀勝』卷七〇。

99 『全唐文』の撰者の紹介記事による。

100 常盤大定『支那における仏教と儒教道教』（東洋文庫、昭和四一年八月再版）一三頁。

101 『旧唐書』卷二六〇、『新唐書』卷一七七。

102 李景儉については『旧唐書』卷一七一、『新唐書』卷八

一付譲皇帝憲伝。

103 前掲書『支那における仏教と儒教道教』一二八頁。

104 拙稿前掲『江西の禅宗の推移（上）』一一一頁。

105 『旧唐書』卷一六五、『新唐書』卷九一付溫大雅伝。

106 『澧県県志』卷三。『通志』卷二四〇。

107 『輿地紀勝』卷七〇。

108 『澧県県志』卷一〇。

109 『通志』卷二七。

110 同上。

〔付録〕

唐・五代時代の湖南関係禅宗年表

667年 司空本淨、東平『祖堂集』『景德伝燈錄』は絳州に生まれる（『宋高僧伝』卷8、『祖堂集』卷3。『景德伝燈錄』卷5は

寿齢を記さず。以下、宋、祖、景と略称）。

677儀鳳2年癸酉之歲4月8日、南嶽懷讓、金州に生まる（『宝

林伝』卷10、椎名宏雄『宝林伝』の逸文の研究による。但し儀鳳2年は丁丑、癸酉は咸亨4年、673である。祖3は干支なし。金州安康に生まる（宋9）。京兆に生まる（碑銘）。

688垂拱4年丁亥之歲、南嶽懷讓15歳、荊州玉泉寺に往き、弘景

律師に事す（宝林伝10。但し垂拱4年は戊子、丁亥は垂拱3年

687である。677年生まれとすれば688年は12歳。祖3は干支なし）。

695南嶽懷讓、弘景律師につかえて8歳、名を懷讓という（宝林

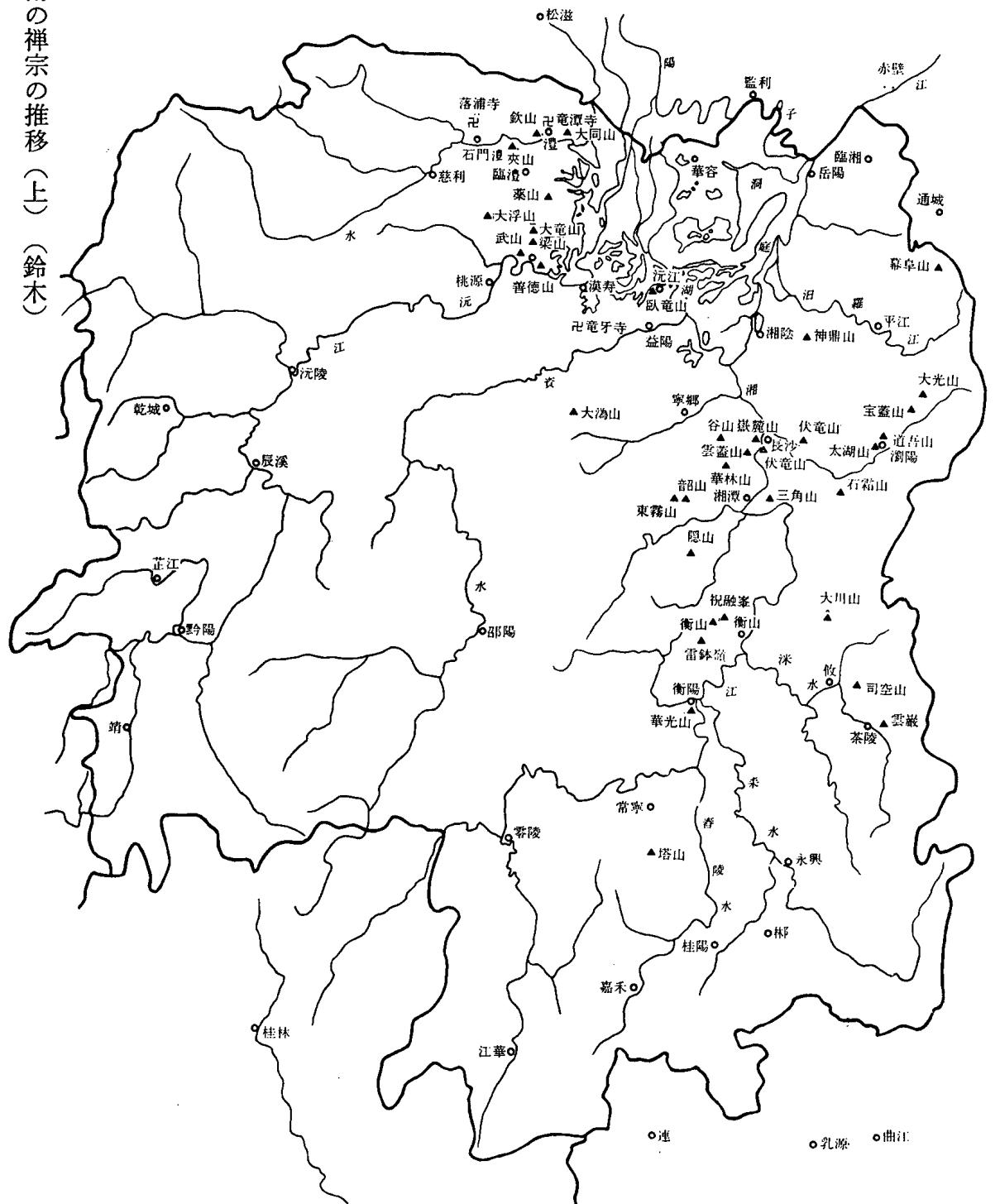
伝10）。

696万歳通天元年丙申之歲4月12日、南嶽懷讓、荊州玉泉寺で受戒す（宝林伝10。祖3は干支なし）。

697南嶽懷讓、受具（碑銘、宋9）。

700久視元年庚子之歲7月18日、自ら嘆じて（以下省略さる。

湖南地方の禅宗地図（唐・五代）



## 湖南の禅宗の推移（上）（鈴木）

「『宝林伝』の逸文の研究」。南嶽懷讓、曹溪に向う（祖3、千支なし）。

石頭希遷、端州高要に生まる（宋9、景14）。

翠微恒月、上党に生まる（宋10）。

711 702 景雲2年辛亥之歳、南嶽懷讓、六祖を辞す（宝林伝10。祖3は千支なし）。

713 先天2年、南嶽懷讓、始めて衡嶽に往きて般若寺に居す（景5）。

開元初、司空本淨、南嶽司空山に入る（宋8）。

澧陽慧演、襄陽に生まる（宋29）。

728 727 南嶽澄心、東海に生まる（宋29）。

開元16年、石頭希遷、羅浮山にて受具（宋9、祖4）。この年帰つて山（＝曹溪）に就く（宋9）。

730 麓山寺碑、前陳州刺史李邕撰并書、大唐開元18歳次庚午9月壬子朔11日、壬戌建、江夏黃仙鶴刻（『湖南通志』卷262、以下通志と略称）。『金石萃編』に案するに碑は嶽麓書院にありと（同）。cf 「嶽麓山寺碑」李邕撰并書、開元19年7月立、潭（宝刻類編3）。

736 736 涇州刺史薛自勸を澧州別駕に貶す（資治通鑑214）。

招提慧朗、韶州曲江に生まる（祖4）。

738 741 開元中、馬祖道一、伝法院に住して終日坐禪す（景5）。禪定を衡嶽の伝法院に習う（景6）。

開元寺は武陵県城の南にある。梁、普通中（520～527）郡人丁堤が宅を捨てて寺となし、寶應と号した。唐、開元中、今の名に改めた（通志240）。

742 天宝初、石頭希遷、衡山の南寺に行く（宋9、祖4、景14）。天宝初、六祖の徒希遷禪師がいて、南寺に遊び、石の状の台なるが如きあるを見て、乃ち庵してその地に居す。故に寺を南台禪寺と号す。唐御史劉軻撰するところの碑もここにあり。遷没して後、山の躰に塔し、謚して無際（大師）見相（塔）という（南嶽總勝集卷中）。

744 天宝3載、南嶽懷讓、衡嶽（＝南嶽）に終る。寿68、臘48（張正甫「衡州般若寺觀音大師碑銘并序」、全唐文619）。天宝3年8月11日、衡嶽に円寂す。勅して大慧禪師最勝輪塔と謚す（景5）。8月10日、寿68、臘48（宋9）。8月12日に終る（祖）。12月13日、司空本淨、召されて、京の白蓮亭に入る（祖3、景5。仏祖統紀40は月日をいわす）。

東寺如会、韶州始興曲江に生まる（景7。宋11は「曲江」なし）。

藥山惟儼、南康信豐原に生まる（唐仲「澧州藥山故惟儼大師碑銘并序」、全唐文536。宋17、祖4、景14は絳州とする）。827年

条を見よ。

陽山は武陵県北30里にある。梁山はもと陽山の名であった

が、天宝6載、名を改めた（通志23）。

招提慧朗、13載、鄧林寺模禪師によつて出家（祖4）。

藥山惟儼、絳州に生まる（景14、祖4。宋17は759年とする。碑銘は744年とする）。

南嶽元觀、長安に生まる（宋9）。

茗溪道行、桂陽に生まる（宋20）。

9月、京兆尹李峴、楊國忠にくまれ、長沙太守に貶さる（通鑑217）。

11月、吉溫を澧陽長史に貶す（同）。

正月15日、両街の名僧碩學を召し、内道場に赴いて、司空本

淨と仏理を闡揚せしむ（祖3、景5）。

招提慧朗、17歳、衡嶽に遊ぶ（祖4）。

長沙太守李峴を都副大使となす（通鑑218）。

742 (756) 天宝中（祖・景は天宝3年とする）司空本淨、楊光庭の薬を采るに因つて、邂逅相い逢い、道を論じて日を終う（宋8、祖3、景5）。

招提慧朗、20歳、衡嶽に受具（祖4）。

西園曇藏生まる（宋11）。

藥山惟儼、絳州に生まる（宋17。景14、祖4は751年とする）。正月、荆南節度使呂諲、奏して、江南の潭・岳・郴・邵・永

湖南の禪宗の推移（上）（鈴木）

・道・連・黔中の涪州をみな荆南に隸せしめんことを請い、これによる（通鑑）。

上元2年5月5日、司空本淨入寂、寿95、大曉禪師と謚す（宋8、祖3。景は寿齢を記さず）。

藥山惟儼、年17、潮の西山に抵り、惠照禪師のもとで出家（碑銘）。祖堂集・伝燈錄の生卒年からみれば767年になる。宋高伝僧の生卒年からみれば775年となる。

茗溪道行、12歳、南嶽道場に出家し、学を受く（宋20）。

廣德2年、石頭希遷、門人に請われて梁端（潭州）に下る（宋9、景14）。この頃招提慧朗、潭州に住す（韶州月華山花界寺伝法住持記）に正元〔貞元〕11年（795）月華山に住したことをいう。及び劉軻の碑文に基づいたと思われる30余年招提を出なかつたという記事参照）。石頭が梁端に下つたのは梁端招提の慧朗の要請によるのである。

763 (764) 広徳中？、僧慧開、大明禪寺を開く。唐開元中（713～741）に至つて重興。柳子厚撰の大明和尚碑がある。南嶽廟の北、山を登ること25里の煙霞峯側にあり、思大和尚宴坐の処である（南嶽總勝集卷中）。

藥山惟儼、受具（碑銘による）。773年条を見よ。

道吾円智、予章海昏に生まる（宋11、景14。祖5は鍾陵建昌の生まれとし、雲巖の肉兄とするが、これは非）。4月庚子、湖南兵馬使臧玠、觀察使崔灌を殺す。澧州刺史楊

湖南の禪宗の推移（上）（鈴木）

子琳、兵を起てこれを討つ。癸未、左羽林大將軍辛京果を湖

南觀察使となす（通鑑224）。

771 4月、澧州刺史楊子琳入朝す。上これを優接し、名を獻と賜う（同）。

772 潘山靈祐、福州長溪に生まる（宋11、祖16、景9。全唐文820  
鄭愚の「潭州大潘山同慶寺大円禪師碑銘并序」は長溪を言わ  
す）。

773 大曆8年、東寺如会、國一禪師（II法欽）の門下に止まる  
(宋11)。

774 葉山惟儼、衡嶽希琛律師について受具（碑銘、宋17、祖14、  
景14）。

774 5月、澧朗鎮遏使楊猷、澧州より入朝（通鑑225。同年正月条  
参照）。

779 正月、李泌を澧州刺史となす（通鑑225）。

779 初め衡州刺史曹王果に治行あり。湖南觀察使辛京果はこれを  
疾み、潮州刺史に貶す。時に陽炎は道州にあり、その直なるを  
知り、相に入るに及んで、復して擢んで衡州刺史となす（同）。  
李泌、大歷中、澧州刺史となり、更に新城を築く。澧人徳として  
これを歌い戎昱これがために頌す（方輿勝覽30）。

766 779 湖東寺は衡州府清泉県の東にあり。唐の大曆中に建つた  
(通志239)。法照禪師の卓錫の処である（『清泉県志』卷3）。  
天皇道悟、馬祖に参じて二夏を過ごし、後石頭に参ず（景

14)。

780 建中元年、翠微恒月、疾を示して終う。寿79、その年3月12  
日塔に遷す（宋10）。

781 7月、邵州の賊帥王国良降る（通鑑226）。

782 大慈實中、河東蒲坂に生まる（宋12、景9）。

783 10月、湖南觀察使曹王果を江南西道節度使となす（通鑑227）。  
雲巖曇晟、鍾陵建昌に生まる（景14）。

784 德山宣鑑、劍山西川に生まる（祖5、宋12は西川をいわず）。  
景15では780年生まれになる。

784 南嶽皓玉、年80余歳、興元中、塔に入る（宋29）。

785 15歳、福州建善寺法常律師について出家（景9。宋11は法恒とする。また歳を冠年とする）。

786 貞元初、龐蘊、石頭和尚に謁す（景8）。

786 貞元初、葉山惟儼、葉山に結庵（碑銘、祖4）。

786 貞元初、僧如滿は仏光大師と賜い、横竜寺を祝融峯の西に肇  
めた（廖侁「横竜寺記」、通志239）。cf 横竜寺は南嶽の中洞にあ  
り、開山仏光禪師の旧庵がもとここにあった（南嶽總勝集卷  
中）。

787 貞元2年、西園曇藏、衡嶽の絶頂に棲止す（宋11、景8）。

787 紫玉道通、南嶽に往き、石頭に見ゆ（宋10）。

787 李泌、中書侍郎同平章事を拝す。初め、明璫禪師、南嶽上封  
に居り、人は嬾残と号す（中略）。泌、事をもつて帝がために

その高行を言う。詔してこれを徵す。使者、石窟宣麻に至る。

瓊、寒涕垂頤、凝然として坐し、以て意に介せず。使、回つて

以つて聞するに、帝益々嗟敬す（仏祖統紀41）。

787 ? 濬山靈祐（出家して3年にして）受具す（宋11）。

790 貞元6年庚午歳12月25日、石頭希遷入寂、寿91、臘64（景14）。

祖4は6日とする。宋9、祖4は臘63とする）。門人、塔を東

嶺に建つ（景14）。

792 3月、中書侍郎同平章事竇參を貶して郴州別駕となさんことを請

234）。793年、死を賜う（同）。

7月、陸贊は前湖南觀察使李巽を権判度支となさんことを請

い、上これを許す（同）。

792 頃「唐五寺碑」李巽撰、羅中立八分書。五寺とは般若・南台

・万寿・華嚴・弥陀で、嶽廟の西北1里、集賢峯下、衡嶽禪寺

の前にあり。案するに李巽は、新唐書に伝があり、給事中より出でて湖南觀察使となり、貞元5年（789）江西に徙ると。考うるに、權德輿の遺愛碑に、貞元8年給事中より湖南觀察使に遷るとしているので、史伝の5年江西に徙るとするは誤りに似たり（通志263）。

793 濬山靈祐、23歳、江西に遊び、百丈の大智に参ず（景9）。天

台の智者の遺跡を礼し、百丈に参ず（祖16）。

福州大安、福州に生まる（景9、宋12は閩城とする）。

正元（貞元11年）、招提慧朗、羅浮に遊ぶ途次、月華山に駐

錫しこれに居す（余靖「韶州月華山花界寺伝法住持記」）。

796 貞元12年、澧陽慧演入寂、寿79（宋29）。

799 濬山靈祐、受具（碑銘に臘55と。景9、祖16では790年となり、宋11では794年となる）。

800 湖南觀察使、河中の呂渭、永州刺史陽履の贓賄を発く（通鑑235）。

801 德山宣鑑受具（祖5、宋12）。

『宝林伝』十巻成立（『釈氏通鑑』卷10、柳田聖山『初期禅宗史書の研究』）。

802 貞元18年壬午11月、南嶽澄心入寂。寿76、その月27日を以て

塔に入る（宋29）。

805 9月、朗州武陵、龍陽は江の漲るにより、万余家を流す（通鑑236）。

9月、礼部員外郎柳宗元を貶して邵州刺史となす（同）。11月、柳宗元を永州司馬に、劉禹錫を朗州司馬に、岳州刺史程異なるとしているので、史伝の5年江西に徙るとするは誤りに似たり（通志263）。

順宗、仏光如滿に法を問う（景6）。

夾山善会、広州峴亭に生まる（景15、祖7は廣州を漢広とい

う）。

805 橫竜寺は衡山県西北祝融峯の後にあり、唐貞元間に建つた（通志239）。

806 正月、鄂岳觀察使韓皋を奉義節度使となす（通鑑237）。

湖南の禅宗の推移（上）（鈴木）

807 石霜慶諸、廬陵新淦玉笥郷に生まる（宋12。景15、祖6、禅林僧宝伝5は郷名をいわす）。

この歳、李吉甫、元和国計簿を撰して、これを上る。総計、天下の方鎮四十八、州府二百九十五、県千四百五十三。その鳳翔、鄜坊、邠寧、振武、涇原、銀夏、靈塩、河東、易定、魏博、鎮冀、范陽、滄景、淮西、淄青等十五道七十一州は戸口外と申べず。毎歳の賦税は倚んで浙江東西、宣歙、淮南、江西、鄂岳、福建、湖南八道四十九州一百四十四万戸より辨止し、天宝の税戸に比し、四分の三を減す。天下の兵、仰給の県官は八十三万余人、天宝に比して三分の一を増し、おおむね二戸に一兵を資せり。その水旱の傷ぶるところ、非時の調発はこの数に在らず（通鑑237）。

809 大慈寔中、受具（景9、宋12は臘54と）。南方、旱饑す（通鑑237）。

810 12月、御史中丞呂元膺、鄂岳觀察使となる（同238）。

夾山善会、9歳、潭州竜牙山に出家す（景15）。

元和8載、衡陽太守令狐権、南嶽懷讓の前述を問い合わせ、衣財を捨てて、以つて忌齋に充つ。これより毎歳8月、観音忌を為す（宋9）。

811 元和10年、故大師（南嶽）の弟子道一の門人、惟寬・懷暉、南嶽の塔を建つ（『仏祖歴代通載』卷13）。これは張正甫の碑銘を引くのであるが、『全唐文』の碑銘では元和18年とする。

元和は十五年までであり、通載の方が理に合う。805～823年条及び823年条参照。

816 9月、韋貫之を湖南觀察使となす（通鑑239）。

817 元和12年、福州大安、建州浦城県乾元寺（鳳棲寺）に受戒す（この時兜率壇へ靈感壇▽が置かれた）（宋12）。

819 12月、中書侍郎同平章事崔群を以つて湖南觀察使となす（通鑑241）。820年6月、吏部侍郎となす（同）。

石霜慶諸、13歳、洪井西山紹鑾禪翁を師として出家（宋12、景15、禅林僧宝伝5。祖6は師名をいわす）。

元和15年庚子歳正月22日、招提慧朗入寂。寿83、臘64（祖4）。

820 7月、李翹、朗州刺史となる（旧唐書160）。

8月、再び令孤楚を衡州刺史に貶す（通鑑241）。

荅溪道行、澧州開元寺で入寂。寿69（宋20）。

元和末、鴻山靈祐、大鴻山に棲止す（宋11）。景德伝燈錄には馬祖が善覺を排して靈祐を鴻山に住せしめる問話があるが、宋高僧伝によれば、馬祖寂後久しくして大鴻山に住したことになる。

820 8月、元和中、龐蘊、襄漢に北遊す（景8）。

鄧隱峯、五台山に遊ぶ（宋21）。

嘉禾藏廩、長沙嶽麓寺の靈智律師のもとで出家（宋12、景10）。

李翹、坐して朗州刺史となり、藥山惟儼に謁す（宋17）。

僧曇叙、大鴻山密印寺開基（覓範慧洪「密印禪寺碑記」）。密印寺は寧鄉県西150里の大鴻山にあり、唐元和中、裴休が奏して

建て、額を賜った（通志238）。

常侍帰登、南嶽懷讓の碑を撰すという（宋9）。815年条及び823?年条参照。帰登は820年卒であるから、それ以前の撰文で、張正甫と前後する。

龍牙寺は益陽県の西百里にあり、唐元和中、僧円洪の開くところにして、初め延祥寺と名づけた。相伝うるに、宋の時、竜あり、白須の翁と化し、講を聞き、去るに臨んで仏牙を献じた（通志238）。

△記年不名——「龍牙禪院記」邱驛撰并篆額、馮曜書、潭州（宝刻類編7）。

823? 元和18年（元和は15年まで、18年は長慶3年に当る）、故大弟子道一の門人惟寬・懷暉、南嶽懷讓の塔を建つ（張正甫「衡州般若寺觀音大師碑銘并序」全唐文619）。815年条及び805?~820年条参照。

823 長慶癸卯歳8月19日、東寺如会入寂。寿80、伝明大師と謚し、塔は永濟という（宋11。景7は月日をいわず）。謚号塔名は夾山と混同する。

長慶3年、嘉木藏廩、武陵開元寺智總律師について受戒（宋12、景10は律師の名をいわず）。

824 夾山善会、受具（景15、祖7）。

821~824 長慶中、劉軻、石頭希遷の碑をつくり、無際大師見相塔と賜う（宋9、景14）。

827 太和元年、西園曇藏、嶽中で入寂。寿70（宋11）。

828 12月6日、藥山惟儼入寂。寿84、臘60（唐仲「澧州藥山故惟儼大師碑銘并序」全唐文536）。20日入塔（同）。碑銘は文頭に

「上嗣位明年澧陽郡藥山积氏大師以十二月六日終於修心之所」という。上とは文宗を指すであろう。敬宗は826年11月崩じ、12月文宗が即位した。宋高僧伝が828年寂とするのは、文宗の太和2年と誤ったがためであろう。位を嗣いだ明年とは太和元年のことである。祖堂集、景德伝燈錄が834年入寂とするのは、碑銘の撰せられた年を入寂の年と誤ったためであろう。建塔は寂後8年であったことを碑銘では言っているのである。

825~827 宝曆中、南嶽懷讓に大慧禪師と謚し、塔を最勝輪と号す（宋9）。

828 大和2年、藥山惟儼入寂、寿70（宋17。景14、祖4は834年と827年条参照）。

11月、杜元穎を邵州刺史に貶す（通鑑244）。

巖頭全齡、泉州に生まる（景16、宋23。祖7によれば826年泉州南安県生まれ）。

829 太和3年己酉10月27日、雲巖曇晟入寂。無相大師と謚し、塔を淨勝といふ（宋11。景は841年入寂とする）。

## 湖南の禅宗の推移（上）（鈴木）

- 830 石霜慶諸、23歳、嵩嶽で受具の後、洛陽で律を学ぶ（宋12、景15。祖6は20歳、826年とする）。  
南嶽元觀入寂、寿79。10月2日塔に遷す（宋9）。
- 831 石霜慶諸、受具（景15、禪林僧宝伝5。宋には臘59と。祖6では82年となる）。
- 832 李翹、湖南觀察使となる（旧唐書160）。
- 833 太和8年2月、藥山惟儼入寂。寿84、臘60、弘道大師と謚し、塔を化城といふ（景14。祖は臘65とする）。827年条参照。
- 834 樂普元安、鳳翔麟遊に生まる（景16、祖9。禪林僧宝伝6は南遊とする）。
- 835 9月、張正甫卒す、年83（旧唐書162）。張正甫は進士に及第し、樊沢（742~798）に従つて襄陽の從事となつて累転したが、監察御史の于頤は樊沢のよこしまなるに代えて正甫を留めようとした。正甫は堅く辞したので、遂に誣奏せられ、郴州長史に貶された。後、戸部員外郎、戸部郎中、工部尚書、檢校兵部尚書となつた。「唐觀音大師碑」張正甫撰。南嶽にあり（通志263）。823 ?年条参照。
- 836 4月、潮州司戸李宗閔を衡州司馬となす（通鑑245）。このころ鄭愚（約三十歳）、鴻山に参ず（潭州大鴻山同慶寺大圓禪師碑銘并序）。
- 837 836 大光居誨、長安に生まる（祖9、景16）。
- 838 837 会昌元年辛酉10月26日、雲巖曇晟入寂。寿60、無住大師淨勝の塔といふ（景14。宋11は829年寂とする。祖は元年を干支でいい、27日寂とし、寿齢をいわす）。
- 839 石霜慶諸、35歳、石霜山に止まりて他遊せず（祖6）。
- 840 武帝の破仏で、德山宣鑑、難を獨浮山の石室に避く（景15）。武宗の廢教で、大慈寢中、還俗し、載氏の別墅に居る（宋12）。載氏の別墅は浙江か。
- 841 839 840 鴻山靈祐、会昌の沙汰に遇う（宋11）。その所（大鴻山）を空しくして、にわかに首をつぶんで民となる（碑銘）。
- 842 841 武宗会昌五年、横竜寺遂に廢す（横竜寺記）。
- 843 842 牛僧孺を衡州長史となし、李宗閔を郴州司馬となし、李珏を郴州刺史となす（通鑑248）。
- 844 843 大中初、德山宣鑑、德山古德禪院に入る（景15。祖5、宋12は咸通初△860▽とする）。
- 845 844 閏月、会昌5年廢さるる寺で、僧のよく営葺せる者あらば、自らこれに居するを許す、と勅す。この時、君、相、務めて会昌の政に反す。故に僧尼の弊、みなその旧に復す（通鑑248）。
- 846 845 正月、西川節度使李回を湖南觀察使に左遷す（通鑑248）。9

月、李回を賀州刺史となす（同）。

7月、中書門下奏す、「階下、祚氏を崇奉し、群下、奔走せざるなし。恐らくは財力のおよばざるところあり。これによつて事を生じ人を擾がす。望むらしくは所在の長吏の、量つて樽節を加うるを委ねんことを。度するところの僧もまた行業ある者を選択するを委ねんことを。もし凶粗の人をゆるさば、則ち道を敬うにあらず。郷村の仏舎は兵を罷める日に修せんことを請う」と、これに従う（通鑑249）。

10月、中書令門下奏す、「今、辺事すでにやむ。しかして州府の諸寺、なおいまだ功をおわらず。しばらくこれを成さしめんことを望む。その大県の、州府に遠きものは、ゆるして一寺を置き、その郷村にあらためて仏舎を置くを得ることなれ」と。これに従う（同）。

竜牙居遁、年14にして吉州満田寺に於て出家（景17）。

4月、湖南、團練副使馮少端が衡州の賊帥鄧裴を討ちてこれを平らぐることを奏す（通鑑249）。

12月、中書門下奏す、「度僧、精ならざれば戒法墮壊す。造

寺、節なければ捐費過多なり。請う、今より諸州、元の勅許に準じ、寺を置くの外、勝地靈迹あらば修復を許す。繁会の県は一院を置くを許す。私度僧尼を嚴禁し、もし度僧尼に欠あらば、人を抜んでこれを補い、よつて祠部に申して牒を給さんことを」。これに従う（同）。

853 大中7年癸酉歳正月9日、鴻山靈祐、同慶精廬に終る。寿83、

臘64、大円禪師と謚し、塔を清淨という（景9、碑銘は千支4し。祖16は月日なし。碑銘は臘55、宋11は臘59とする）。全唐文820の鄭愚の「潭州大鴻山同慶寺大円禪師碑銘」は、明統藏に納める「大鴻四記」中の「同慶禪寺碑記」と同文である。鄭愚の碑文は鴻山の謚号塔名を賜つたので、それを記すためであつたから、全唐文の標題の方がよい。863年条、865年条をみよ。また「大鴻四記」中の「密印禪寺碑記」によれば、密印寺の西に大円禪師の塔を修したとする。鄭愚の撰文は856年に撰せられた。

樂普元安、受具（景16、祖9、禪林僧宝伝6）。

854 度支奏す、「河、湟、平らぐるより、毎歲、天下に納むるところの錢は九百二十五万余緡なり。内、五百五十万余緡は租稅、八十二万余緡は榷酤、二百七十八万余緡は塩利なり。」（通鑑249）。

竜牙居遁、嵩嶽に受具（禪林僧宝伝9）。

潭州嶽麓寺沙門疏して言う、「太原に往きて大藏經を求める」と。河東節度使司空盧鈞、副使韋宙、經をもつてこれに施す（仏祖統紀42）。

855 9月、李訥を貶して朗州刺史とす（通鑑249）。

856 勅、「靈感、會善の二寺に戒壇を置く。僧尼のまさに欠くる者を填たすべくんば、長老の僧に委ねて選択し、公憑を給して

湖南の禪宗の推移（上）（鈴木）

両壇の受戒に赴かしめよ。両京の大徳各十人を選んでその事を主どれ。堪えざる者あらばこれを罷め、堪ゆる者は牒を給し、遣して本州に帰せ。戒壇の公牒をしめさず、私容するを得ることなかれ。よつて先に旧僧尼を選び、旧僧尼の堪ゆることなき者は、乃ち外の人を選べ。」（同）。

857 上、晚節頗る神仙を好み、中使をやりて道士軒轅集を羅浮より迎う（同）。

858 5月、湖南の軍乱る。都將石載順等、觀察使韓悰を逐い、都押牙王桂直を殺す。悰は將士に待するに礼をもってせず。故に難に及ぶ（同）。

847 859 楚寧寺は南嶽廟の西北15里にあり、乃ち南台遷禪師（＝石頭）瘞骨の処で、唐の宣宗は（石頭に）南際大師と謚した。見相塔二碑の墨迹は唐裴休相國の建てたところのものである（南嶽總勝集卷中）。

「唐石頭和尚著草庵歌參同契」善円師、石に刻す。南台禪寺にあり。歿して後、謚して無際という。裴相ために見相の二碑を書す。すなわち宣宗大中年間なり（通志263）。

唐宣宗は額を般舟道場と賜った。本朝太平興國中（976～984）

今額（弥陀寺）を賜つた。寺は南嶽廟の西北、山を登ること20里、弥陀峯下にある（南嶽總勝集卷中）。

860 咸通初、德山宣鑑、德山古德禪院に入る（宋12、祖5、景15は大中初～847～とする。）

この頃、福州大安、福州怡山に入る。

847 860 同慶寺は寧鄉県の西、大鴻山にあり、唐大中中、李景讓が奏して建つ（通志238）。

862 咸通3年2月3日、南嶽日照、塔に入る。百八歳という（宋12）。

863 咸通3年2月15日、大慈寔中入寂。寿83、臘54（景9、宋12は年号をいわず、壬午歳とする）。

4月、両街の四寺に各戒壇を置き、人を三七日、度すべきを勅す。上、仏を奉ずること太だ過ぎ、政事を怠る。嘗つて咸泰殿に壇を築き、内寺尼の受戒をなす。両街の僧尼、入り預る。また禁中に講席を設け、自ら経を唱え、手づから梵夾を録す。またしばしば諸寺に幸し、施与すること度るなし（通鑑250）。竜牙居遁、竜牙法濟禪院に説法す（禪林僧宝伝9。洞山に服勤すること8年と）。

863 鴻山靈祐亡じて11年後、謚号及び塔名を賜う（碑銘）。

865 咸通6年乙酉12月3日、德山宣鑑入寂。寿84、臘65、見性大

師と謚す（祖5、宋12は謚号をいわず、景15は寿86とする）。鴻山靈祐亡じて11年後、謚号及び塔銘を賜い、咸通6年乙酉、鄭愚、その事（謚号塔名）を草創す。病氣で、翌年2月、咸山の碑銘を撰す（碑銘）。鄭愚、五十歳も已に極まる（同）。

867 永州湘山の全真禪師、端坐して示寂す。師は郴の人で、遊方して湘山に至り、梵宇を創り、淨土（寺）といつた。四方の禪

衆が雲集し、教を受けた。会昌初、忽ち徒に、厄難が起るから衣冠にかえるがよい、といった。ある晩、鬚髪が長くなり、紫霞衣をきて、これを無量寿衣といった。青空冠を頂いて、それを真空法冠といった。武宗が仏教を排し、宣宗が復仏したが、師は衣冠をとかなかつた。世に、無量寿仏が化現した、といつた（仏祖統紀42）。『湖廣志』にいう、全真は郴州の人で唐の至徳の初め（七五六）、湘源県に来て淨土院をはじめた。宋州刺史韋宙が使を遣して、請うと翌日、四門からそれぞれ入つてくるのが見えた。韋宙が迎えると一人だけだった。その神通は（多くて）つぶさには述べられない。卒した年は百三十五という。五代の時、その神異の多きによつて湘源県を全州と改めた（十国春秋68）。

868 大光居誨、受具す（祖9）。

9月、龐勛等、湖南の監軍に至り、計をもつてこれを誘い、ことごとくその甲兵を輸せしむ（中略）。浙西を過ぎり淮南に入る（通鑑251）。

869 頃 この頃より石霜山は叢林として名があがる。枯木衆といわれる（宋12、景15、禪林僧宝伝5）——「石霜慶諸、石霜山に止まること20年間」というより逆算す。祖6は841年入山とする）。

870 夾山善会、夾山に院宇を成す（景15）。

873 咸通14年、福州大安、延聖大師と号し紫衣を賜う（宋12）。

湖南の禅宗の推移（上）（鈴木）

860 ～874 竜潭寺は北門の外にある。唐の咸通中、僧崇信が建てた（澧県志3）。北門外西にある。崇信禪師の道場である。城外

8景の一（同10）。崇信は澧陽に30年住した（輿地紀勝70）。

乾明寺は武陵県の東南15里の善徳山下にあり、唐の咸通中に建つた。初め徳山精舎といい、また古徳禪院とも名づけた（通志240）。847年条参照。

877 乾符丁酉、大慈寰中に性空大師と謚し、塔を定慧という（宋12。景9は僖宗として年号干支をいわす）。

878 3月、群盜、朗州岳州を陥とす（通鑑253）。

879 5月、泰寧節度使李係、晟の曾孫なり。口才あるも実に勇略なし。王鐸、その家世良將なるをもつて、奏して、行營副都統兼湖南觀察使となし、將精兵五万並びに土團をして潭州に屯せしめ、もつて嶺北の路を塞ぎ、黃巢を拒ましむ（通鑑253）。

10月、黃巢、嶺南にあり、士卒、瘴疫にかかりて死する者、十に三、四。その徒、北に還つて大事を図らんことを勧む。

巢、これに従う。桂州より大紙數十を編み、暴水に乗り、湘江に沿つて下り、衡、永州を経、漂州城下にいたる。李係は城にこもつてあえて出でず。巢、急に攻めて、一日にしてこれを陥す。係は朗州に奔る。巢、戍兵をことごとく殺し、流戸、江をおおつて下る。勝ち進んで江陵に通り、衆、五十万と号せり

880 9月、群盜、澧州を陥とし、刺史李詢、判官皇甫鎮を殺す（同）。

湖南の禪宗の推移（上）（鈴木）

（同）。

12月、百官退朝し、（黃巢）乱兵、城に入ると聞き、路布に竄匿す。令孜帥神策兵五百、帝を奉じて金光門より出ず。百官皆これを知るなし（通鑑254）。

正月、車駕、成都に至る（同）。

中和元年辛丑11月7日、夾山善会入寂。寿77、臘57、伝明大師と謚し、塔を永濟といふ（祖7、景15）。29日、本山に塔す。

謚号塔名は東寺如会と混乱。

12月、江西の將閔勗、湖南をまもり、還りて漂州を過ぎり、

觀察使李裕を遂い、自ら留後となす（通鑑254）。

初め高駢、荆南を鎮め、武陵の蛮、雷滿を補して牙將となし、蛮軍を領す。駢、淮南に至るより、逃帰して衆千人をあつめ朗州を襲い、刺史崔翥を殺す。詔して、滿をもつて朗州留後となす。歲中、三四を率し、兵を引きて荆南を寇し、その郭に入り、焚掠して去る。大いに荆人の患となる。陬渓の人、周岳、かつて滿と猶し、肉を争つて鬭い、滿を殺さんと欲し、果たさず。滿の、朗州によると聞き、また衆をあつめて衡州を襲い、刺史徐顥を逐う。詔して、岳をもつて衡州刺史となす。蛮の向瓌もまた夷獠数千を集めて澧州を攻め陥とし、刺史呂自牧を殺し、自ら刺史と称す（同）。

883 8月、湖南を升らしめて欽化軍となし、觀察使閔勗をもつて節度使となす（通鑑255）。

中和3年癸卯10月22日、福州大安、怡山の丈室に坐化す。寿91、臘67。円智大師、聖真の塔と賜う（宋12。景9は干支をいわす、黃檗寺に帰つて入寂すと）。楞伽山に塔す（景9）。中和三年、蔡州秦宗權、孫儒・劉建峯・將兵を万人遣りて、弟の宗衡に属せしめ、淮南を略地する（五代史記66）。資治通鑑は885年閏月とする。

885 正月、荆南監軍朱敬政の募つたどころの忠勇軍、暴横なり。陳儒これを患う。鄭紹業の鎮は荆南なり。大將申屠琮、將兵五千を遣りて、黃巢を長安に擊たしむ。軍、還り、儒、琛に告げ、これを除かしむ。忠勇の將、程君從これを聞き、その衆をひきい、朗州（雷滿）に奔る。琮、これを追撃し、百余人を殺す。これより琮、また軍政を専らにする。雷滿、しばしば荆南を攻掠す。儒、重賂してこれをしりぞく。淮南將、張環、韓師徳は高駢に叛き、復、岳の二州により、自ら刺史と称す。儒、瓌を行軍司馬に摂し、師徳を節度副使に摂し、兵をひきいて雷滿を撃たんことを請う。師徳、兵を引いて峠を上り大いに掠め、岳州に還る。瓌、兵を還してついに儒を追い、これに代る。儒の將、行在に奔る。瓌、おびやかし、還り、これを囚う。瓌は渭州の人にて、惟は貪暴なり。荆南の旧將夷滅して殆ど尽く（通鑑256）。

886 6月、衡州刺史周岳、兵を発して潭州を攻む。欽化節度使閔勗、淮西の將黃皓を招いて城に入れ、共に守る。皓、ついに勗

を殺す。岳、攻めて州城を抜き、皓を擒えてこれを殺す（同）。

「慈雲禪寺碑」（II澧陽葉山寺）、唐光啓2年、雷満、奏して

立つ。額の断碑尚存す（輿地碑記目3。輿地紀勝70）。

887 光啓3年丁未4月8日、巖頭全豁、賊に殺さる。寿60（景16。宋23は3年なし。祖は中和5年乙巳4月4日とする。この年は885年で、3月より光啓と年号を攻めた。また臘44とする）。僖宗（873—888在位）清嚴大師と謚し、塔を出塵という（景、宋。祖は清儼大師とする）。

888 光啓4年戊申2月20日己亥、石霜慶諸入寂。寿82、臘59。善会大師と謚し、塔を見相といふ（景15、禪林僧宝伝5。祖6は10日とする。また寿80とする。宋12は2月己亥とし、干支は日に当る）。3月19日葬る（景15。宋12は15日とする）。4月10日とする。また寿80とする。宋12は2月己亥とし、干支は日に当る）。3月19日葬る（景15。宋12は15日とする）。4月10日とする。また寿80とする。宋12は2月己亥とし、干支は日に当る）。3月19日葬る（景15。宋12は15日とする）。4月10日とする。また寿80とする。宋12は2月己亥とし、干支は日に当る）。3月19日葬る（景15。宋12は15日とする）。4月10日とする。また寿80とする。宋12は2月己亥とし、干支は日に当る）。

欽山寺は彭山西5里（澧州西15里）にある。唐、大徳中（文

徳中？。文徳は888年のみ）。僧文遂が建てた（澧県志3）。

888 石霜寺は唐の僖宗の時に崇勝寺と賜つた（通志238）。

890 「唐朗州德山故先和尚塔銘」僧元会撰文、大順元年、在常德府。案するに楚実題作の宣鑑禪師塔銘なり（通志267）。

890 895 大聖守賢、泉州永春に生まる（宋23、乾徳中入寂、寿74と）。

891 中書侍郎、同平章事張濬を鄂岳觀察使となす（通鑑258）。

894 5月、劉建鋒、馬殷、兵を引きて澧陵に至る。建鋒、潭州に

入り自ら留後と称す（通鑑259）。

896 4月、武安軍節度使劉建鋒、既に志を得、酒を嗜み、政事に親します。長直兵陳瞻の妻美し。建鋒これと私にす。瞻、建鋒

を撃殺す。諸将、瞻を殺し、行軍司馬張佶を迎えて留後となさんとす。佶、府に入らんとして、馬忽ち踴齶し、左髀を傷つく。時に馬殷、邵州を攻めて未だ下さず。佶、諸將に謝して曰く、馬公、勇にして謀あり。寛厚樂善、吾の及ばざるところ、眞の主なりと。乃ち牒をもつてこれを召す（中略）。殷、すなわち親從都副指揮使李瓊をして、留めて邵州を攻めしめ、ただちに長沙に至る（通鑑260）。唐、馬殷に潭州刺史を拝す（五代史記66）。

898 3月、馬殷に知武安留後を命じ、いくばくもなくして本軍節度に進む（十国春秋67）。『五代史記』は897年武安軍節度使になつたとする。

光化元年戊午12月2日午時、梁普元安入寂。寿65、臘46。寺の西北隅に塔す（景16。祖9は2年戊午歳とするが、元年の誤り。禪林僧宝伝5は1日とする）。

光化初、僧懷省、帰し、横龍寺、初の規模（破仏前）に復興す（横龍寺記）。

902 馬殷、李瓊を桂州刺史となし、いくばくもなくして、表して桂管觀察使を授く（十国春秋67）。

903 天復3年癸亥9月3日、大光居誨入寂。寿67、臘36（祖9。

湖南の禅宗の推移（上）（鈴木）

景16は臘をいわす）。

△記年不明——南嶽玄泰、65歳寂（宋17、景16、祖9）。玄泰は道吾円智（835年寂）の碑文を撰し、巖頭（887年寂）の碑文も撰し、石霜慶諸（888年寂）の言行を纂録し、曹山（901年寂）の塔銘も撰しているから、901年までは健在であった。石霜の弟子では大光居誨が837—903の人で67歳寂、九峯道虔は921年寂であることを参考にし、石霜の上足大光居誨よりも下と思われ、玄年泰は900年代初めの入寂ではなかろうか。

七宝寺は南嶽の東北35里にあり、昔高僧玄泰が布衲と号して

ここに居り、禅理に深く、歌詩をよくした（南嶽総勝集卷中）。

907 4月、梁太祖、馬殷を侍中兼中書令に挙げ、楚王に封ぜしむ（十国春秋67）。

5月、弘農王渥、兵三万をして入寇す（同）。

908 5月、静江節度使同平章事李瓊卒す。この月、秦彦暉、朗州に克ち、雷彥恭を広陵に奔らす。澧州刺史向瓌來り降る。（馬殷）始めて澧朗二州の地を得（同）。

909 9月、歩軍都指揮使呂師周をやり、嶺南を伐ち、十余戦。昭賀・梧・蒙・龔・富の6州を取る。王の土地すでに広く、民をやすんじ、士を礼し、湖南ついに安んず（同）。

6月、王はじめて天策府を開く（同）。

天策錢文を鋳す（同）。

910 9月、開平中、南嶽惟勁、続宝林伝4巻を撰し、貞元（785）

以後の禪門継踵の源流を紀す（景19）。開平中、楚王馬氏、南嶽惟勁を奏して紫を賜い、宝聞大師と署す（宋17。宋によれば開平に紫号を賜つたのであって、続宝林伝4巻の撰述がこの間にあつたというのではない。惟勁は907年までは雪峯山にいた。拙稿「玄沙師備と福建の禪宗」宗教研究224参照）。

911 乾化中、南嶽惟勁、南嶽に入りて報慈東藏（三生藏）に住す（宋17。景19は光化中888—901とする）。

921 始めて永・道・郴の諸州の民丁錢絹米麦を取る（十国春秋67）。支配下に置いたのである。

923 竜徳3年癸未9月13日、竜牙居遁入寂、寿89（景17。禪林僧宝伝9は5年癸未とするが、癸未は3年である。宋13は出世40余齡に近しいといい、寿齡をいわす、12日寂とする。禪林僧宝伝は臘69とする）。

10月、唐主大梁に入り、遂に梁を滅ぼす。王、子の牙内馬歩都指揮使希範をやり、入勤し、洪鄂行當都統の印を納め、本道將吏の籍を上る。唐主、洞庭の広狹を問う。希範、対えて曰く「車駕南巡すれば、わずかに飲馬に堪ゆるのみ」と。唐主大いによろこび、既にしてその背を撫して曰く、「このじろ聞くく、湖南は必ず高郁の國るところとならんと。子のかくのごとくあらば、高郁、何ぞよく得べけんや」と。郁はもとより謀臣なれば、唐、わが爪牙を去らんと欲して、いつわって流言をなし、もってこれを間するなり（十国春秋67）。

925 11月、王、蜀の亡するを聞き、大いに懼れ、表して致仕を求む。唐主聖書して慰勞し、優詔して許さず（同67）。

湖南の地はもとより鉛鉄を産す。都軍判官高郁をもつて、鉛銭を鋤んことを策す。十をもつて銅銭一に当つ。既にまた鉄銭を鋤、乾封泉宝という。九文をもつて貫となし、一をもつて十に當つ。境内に流行す。商旅、境を出でれば銭を用うるところなく、すなわち他貨と易え去る。故によく本土の余るところのものをもつて、天下の百貨と易え、國もつて富饒す。また湖南、桑蠶を事とせず。郁、王にすすめて、輸税者に帛をもつて銭に代えしむ（同）。京師より襄・唐・郢・復等の州に邸を置き、茶を売るを務となす。その利、十倍す。民に茶を造らしめ、商旅に通す。その算を収むるに、歳入は万計なり。これより地はひろく、力は完し（五代史記66）。

927 6月、唐、王を封じて楚国王となす。この月、王、始めて開国し、潭州をもつて長沙府となし、宮殿を立て、百官を置き、みな天子の制のごとくす。しかしてわずかにその名をかえるに、翰林学士を文苑学士といい、知制誥を知辞制といい、枢密院を左右機要司という（十国春秋67）。

929 4月、銅銭一を錫銭百に直つ（同）。

7月、馬希声、王令といつわって高郁を殺す（同）。これより軍中の政、往々序を失す（五代史記注、五代史補）。

11月、王（馬殷）薨す。年79、謚して武穆という（十国春秋67）。

湖南の禪宗の推移（上）（鈴木）

932 67）。武穆王の子は數十人、嫡子希振は長じて賢なり。その次は希声と希範と同日に生まる。希声ついに母の寵をもつて立つを得（十国春秋68）。希振はついに官を棄てて道士となり、清泰中（934～936）卒す（同71）。

湖南の馬希声は父の位を嗣ぐに、連年亢旱なり。祈禱すれども應ぜず。乃ち南嶽司天王廟及び境内の神祠を封閉す。ついに雨ふらず。その兄希震（振II）、入りてこれを諫む。酒を飲みて、中夜に至りて退く。堂前の誼譟なるを聞き、連（みうち）、希震を召す。また入りて希声を見るに、階下に倒立し、衣裳を被らず、その首すでに碎かる。翌日喪を發し、弟希烈（希範か）をもつて位を嗣ぐ（南嶽總勝集下）。長興3年秋7月、希声薨す。衡陽王に追封す。王は性悪にして貨を好む（十国春秋68）。希範を朗州より迎えて、これを立つ。秋8月、希範、長沙に至り襲位す（同68）。希範、性、奢侈なり（五代史記66）。

933 934 正月、唐閔帝、希範を楚王となす（十国春秋68）。

この歳、九龍殿を作る。沈香を刻んで八龍をつくり、金宝で飾つた。各長さ百尺、柱を抱いて相い向い、趣棒の形とし、自らはその中にあつて、自分の体を一竜とした。また会春園、嘉宴堂、金華殿を建て、その費用は鉅万に達した。子弟僚属を携えて会春園に宴遊し、詩を作り酒を飲み、昼夜の節がなかつた。用度が不足すると、國中に賦を加え、民は租賦にたえずにつげた。また財の多少で官の高下の差をつくつた（同68）。

湖南の禅宗の推移（上）（鈴木）

947 天福12年5月、王薨じ、諡して文昭という（同68）。楚また  
大いに乱る（同）。希広立つ（五代史記66）。

950 11月、希萼、入寇し、希広を縊殺す（十国春秋69）。希萼立  
つ。希萼、李景に臣す（五代史記66）。

951 9月（十国春秋69）、希崇、楚の旧将と乱をなし、希崇立つ。  
希崇、彭師嵩を遣りて希萼を衡山に囚せんとするも、師嵩は希

萼を奉じて衡山王となし、李景に臣す。李景、辺鎬を遣りて楚  
に入り、尽く馬氏の族を金陵に遷す。時に周の廣順元年なり

（五代史記66）。

963 乾徳中、大聖守賢、南窯山に入り、身を虎に与えんと、  
寿74（宋23）。

980 乾明寺はもと永慶寺であった。太平興國5年、改めて寺額を  
賜わり、乾元寺と名づけた。またこれを新開寺という（通志  
239）。

「唐雲竜寺記」について「法輪寺古碑跋」に、（中略）法輪寺  
は晋より唐の貞觀中に至るまで、既廢復興すといえども、みな  
竜雲寺と号す。中間に金輪と改むるも、文記の意を尋ねべきな  
し。武后の時、改むるべきのみ。その法輪と号するは太平興國  
5年の勅書なり。崇寧3年2月、修水黃庭堅書す。按するに雲  
竜はこの跋では竜雲に作る。未だいずれか是なるを知らず（通  
志263）。

976 11月、衡嶽寺は、太平興國中、勅して旧額を以つて寺に賜つ  
（984）。

た。昔、嬾瓈和尚が曾つてここに隠れ、李鬼谷と相い会つた  
(南嶽總勝集卷中)。

般若寺は太平興國中、今の福嚴寺の額を賜つた（同）。

観音寺は太平興國中、改めて普濟と賜つた。近ごろ廃され  
た。寺は南嶽廟の東13里、雲密峯の南の下にあり、馬氏が建て  
た（同）。

880 「潭州鐵塔柱文」（開福禪寺伝法沙門道崧鑄經、宋淳化元年庚  
寅歲、李昇鏞字（出典失念）。この鏞文は『湖南通志』卷269に  
掲げられており、それは「上生三帰依發願文」で、潭州觀察判  
官李思明が發願文を鏞り、続いて真言を進士董蘷が書し、道崧  
が經を鏞り、回向文を李昇が鏞つたのである。鐵仏寺塔は長沙  
城湘春門外にあつたのであるが、咸豐壬子（1852）粵賊が寺塔を  
毀し、鉄柱はそのまま草むらにうもれていたのを、長沙學宮に  
移したのである。道崧とは洞山守初の弟子の潭州道崧のことと  
思われる。禪宗が真言の影響を受けている例である。

991 1008 淳化2年、潭州の知、張茂宗、海會用清を雲蓋山海會寺に入  
らしむ（景26）。

1016 至道2年4月2日、海會用清入寂（景26）。

昭和五十六年度文部省科学研究費一般研究（C）によ  
る研究成果の一部